

辨榮聖者
光明大系

無礙光

光明大系

無礙光・無對光

卷頭お写真説明

(1) 辨榮聖者尊影 大正九年七月 北九州市若松区安養寺庭園にて

(2) 阿弥陀如来座図 絹本極彩



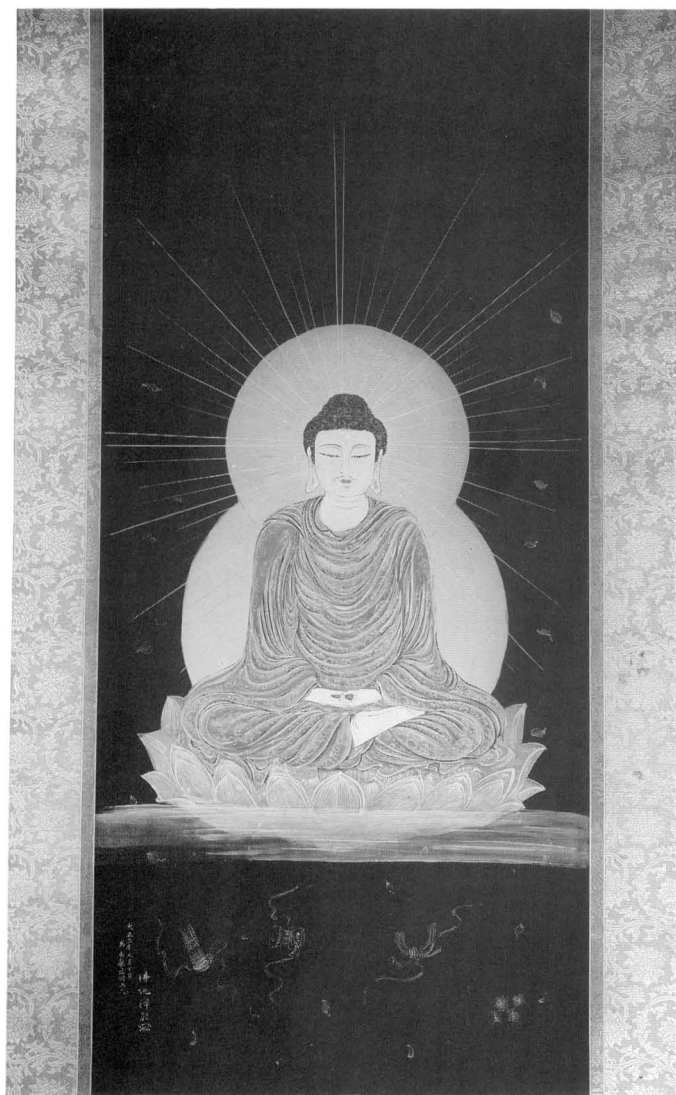
光明大系

無礙光・無對光

卷頭お写真説明

(1) 辨榮聖者尊影 大正九年七月 北九州市若松区安養寺庭園にて

(2) 阿弥陀如来座図 絹本極彩





菩提光佛

如來無邊乃光明身

四尺高身乃寸身

通神活身

照身

身生乃不見身

明身



吾願先佛

如來善願乃先導也

非聖正哉思願乃

聖信品識乃力也

衆生哉解終

自聖之也

無量光佛



他國無量光佛

教化眾生無量

阿彌陀佛
是名阿彌陀佛



大般涅槃經

證入

無

礙

光

前

篇

（目次は巻末に）

如來無礙の光明は

神聖正義恩寵の

靈徳不思議の力にて

衆生を解脱し自由とす

教友にまで申す

尽十方無礙光の中に在ることを信ずる吾親愛なる教友にまで申す。

人々皆其本源おもと身体も精神も共に法身ほうしん如来蔵より稟うけたり、之を仏性ぶつじやうと云う。人々皆心性は弥陀の法身を根底としながら、肉体と共に心も主我じぶんがっての執着と罪惡の皮殻とを被ること、譬へば鉞石の中に金性の有るが如くなり。

人々仏性の具備せると共に罪惡も必然的に具有したり。此の罪惡の皮を除き去りて弥陀の法身より稟けたる自己の眞性を顕現することは是自己の力の及ばざる処なり。

いかにしてか元來賦与せられたる仏性を発顯することを得るとならば、弥陀の聖旨なる本願を仰いで信じ、彼の恩寵に依りて解脱し靈化する外他に道有るなし。

弥陀の本願と云ふ即ち弥陀の意志なり。あなたの聖旨とは法界てんちに満ち渡りて常に衆生の信仰心に感應し解脱げだつし靈化せしむる処の勢力なり。あなたの聖旨は処として在らざるなく活動せざる処なきも、

信仰なき人々は空吹く風とまでも思はで、むなしく日を明し暮して、冥きより冥きに入るものにてぞある。

讚に、弥陀の身心は法界に遍し、衆生心想の中に映現す、是故に汝を勧む常に觀察せよと。言ふ心は、あなたの真身と智慧の心は形こそなけれ何れの処にも実在していまさぬ処こそなけれ、遍ねく満ち渡る処の真身なれば、人々の心想の中に映現するのであるけれ共、衆生自ら信仰の水すまざれば之を知らずに居るのである。能く／＼深く心を留め神を凝して観るときは、あなたの真身の中に、もとより住める我身にして、あなたの智慧と慈悲とに包れたる我心なることは、確かに意識せらるゝのである。

如何に心を用いて阿弥陀如来の身心の中なる我身なることを諦らかに意識せらるゝのであらうと問はゞ、聖の本願の文に、

至心、信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺と云ふ。上の三句を安心の三心と云ひ、次の乃至十念を起行の念仏と云ふのである。信者の安心起行にして最も大事のことである。

至心とは導師は真実心と釈し、真実心はもと仏性として自己の根底に潜みて居るけれども、我て

ふ迷に覆はれて人は虚仮雑毒の非真理なる心となれり。今弥陀の聖名に依りて我の迷なる事を覺りたる時眞実心と引換へて給はる。あなたの聖旨は純粹なる真理のみなれば、我を捨て聖旨に随ふ時眞実心は現はれるのである。

虚仮雑毒の心にて自分可と思ふはあなたの聖旨を信じ得ざる故である。あなたの聖旨を得れば我てふ迷の雲はれて眞実の心顯るゝのである。

我執より起る心は虚仮非真理にて、聖旨より顯るゝは眞実心なり。あなたは眞理なり、非眞理はあなたの反対なるものなり。

次に信樂とは、信とは深くあなたの聖旨を信仰して疑はず、樂とは深く信順して背かざるばかりでなく信樂と云ふは深く聖を愛樂する心なり。一切の万物の中に於て最も深くあなたを愛するなり。我身よりも命よりも凡ての者よりも聖を愛するなり。聖を愛するは自己の眞心を愛するので在り。聖を愛するが故に、たとへ肉体の生命は失ふとも聖を愛する時は、此の精神を聖は眞生命の中に、我を愛して、攝取し給ふて、無限の光と寿とに同化し給ふと吾人は信じます。人在りて汝若し阿弥陀仏を信ずる事を捨てざれば汝の生命を失ふべしと云はゞ、余は喜んで生命を失ふも信仰を捨つるに忍びず、

其故は眞生命と肉の生命とは換ゆる事能はざればなり。誰か一の土塊と無価の金剛石を換ゆるものあらんや。

又一切の万物は尽く彼の仏の有なり。故に彼を愛し彼に抵せらるれば万物は自己の所有となるなり。又我は全体を愛する故にあなたを愛す。凡て万物は一としてアナタの一分ならざるはなし、全体は唯独り絶対なる阿弥陀のみ。故に万物にこえて独りあなたを信じ愛樂するなり。

欲生とは即ち欲望なり。何を欲望するか即ち阿弥陀仏国なり。阿弥陀仏国とは一切万物に超越せる眞理なり。即ち至眞と至善と至美となり。眞善美の靈界最高円満の処を神の国又は涅槃界或は淨土といふ。我等の欲望此処にあり。即ち眞仏の世つぎたらん事を望むなり。凡べての物は朽ち壞する事あるも眞理の靈界は不変不壞なり。

眞理の靈界は不変不壞の故に無量壽国といふ。円満至善の故に報土と云ひ、最靈福の故に極樂と云ひ、最清淨至善の故に淨土と云ふ。

終に朽ち果つべきものは最終の目的とするに足らず。非眞理は真人の欲望する処にあらず。我等の欲望は弥陀の世つぎたらんことなり。これ無上の位置に到達して無窮に神の働きを以てあらゆる万類

を救済せんが為にして、幸福主義の欲望を充たさんが為に彼の国を望むにあらず。

彼国に生れんと欲するも此生命終つて始めて生ずるものに非ず。此肉体を転ぜずして、唯天然の意志を転じて、弥陀の真生命に入り、弥陀大我の中の自己にして弥陀を離れたる個人なるに非ざる事を知り、此身は弥陀の一切処に周遍せる性能を実現せんが為の身なる事を意識して、弥陀の真意実現として行動せば足るのみ。真実弥陀の真我の中の我として弥陀の生命の中の生命たるを識り、之に依つて行動せば此精神此儘無量寿の分身なり。此命を捨てて始めて無量寿国に入るを待たず。

弥陀は此目的の為に、我等に法身ほふしんより此身を分出して人間界に現し出すので、真に此理を信ずる時は此身も心も本より法身より分出したので、而してまた報身の光りと寿とに帰命融合して始めて真理が現はれて来るのである。さればとて此命終りて真実の浄土なきに非ず。弥陀の実在は真実にして此世界の仮りのものなる如くに非ず。不変不壊にして常いつもかたまる住なり。此身の果には実在の其真実妙界まことみくにに帰入うれまするので、いまは精神が浄土に住み遊ぶのであると信ずべし。

断へずあなたの聖旨みねの実現あらはれんやうに聖名みなを崇あがめて祈り奉らん事を。

至心、信樂、欲生我国とは、

真理と愛と望との三徳なり。此真望愛の三徳は如来の勅命として之を具へねばならぬものなれば、能く／＼かへり見て、真実心なりや、弥陀を信樂するや、靈界（霊界）の欲望いかばかり深きやを顧みよ。是を安心と云ふて、如来の恩寵に対する信仰心なれば是非共具へざる可らざる必要なり。

乃至十念とは、

真心の開発なり、実行なり。（威情 意志 実現 平和安樂歡喜 ときはたらき）

真と愛と望との意志によりて、一心にあなたの聖旨の自己の心に実現せん事を日夜行住坐臥に祈り暮らして絶へざれば、聖旨の実現として内容に顕現して、或は光明と現じ、或は慈悲の御心とあらはれ、漸々に進み行けば、弥陀の中の自己なりと定まり諦（しる）らかに識られてよりは、内面に顕現するばかりに止まらず、口には語となりて現れ真実語愛語となり、身の行為に現れては道德の行為として菩薩の行（おこなひ）となり来るのである。

十念とは阿弥陀仏の聖徳を表彰する聖名（みことな）を称へ、聖名に依りてあなたの聖旨（みしめ）をうけ、聖旨が内心に現はれては、仏智見開発となり、心情には融合安立（あやう）となり、意志には実行となりて、三業（ごう）（身と口と意）仏の如きの行為に現はれるのである。之を略して乃至十念の起行門（おこぎやうもん）と云ふ。

聖旨を領して信心まことに熟する時は、我もなく彼もなく形質は暫く別々なれ共内心は同じく弥陀の一味の海水なれば、之を諸上善人とも清浄大海衆とも申す事なり。

願くば聖旨の実現せん事を祈り奉らんことを。

人生の歸趣

仏教によつて自覺せざる人は、闇黒の生活にして人生は唯肉体の生活を以て終局と思ひ、精神的に永遠の光明を信認することなく、我何より生れ来り、如何に人生の歸趣すべきかを自覺せず。是等を無明生死の凡夫と云ふ。經に「世の人自ら智慧を以て、生の從來する処、死の趣向する処を知らず。不仁不順にして天地に違逆す、其中に於て希望僥倖して長生を求めんと欲すれども、かならず当に死に歸すべし。乃至天地の間に五道分明にして恢廓窈窕、浩々茫茫たり。善惡報応して禍福相承く。身自ら之をうく、誰の代る者なし。数の自然にして、其行ふ所に應じてうくる殃咎、命を追ふて縦捨するを得ること無し。

善人は善を行じて楽より楽に入り、明より明に入り、悪人は悪を行じて苦より苦に入り、冥より冥に入る。

誰か能く知る者あらん。独り仏のみ知り給ふ。教語開示すれども信用する者は少く、生死休まず惡道絶えず」と明し給ふ如く、衆生は自ら生死の真源を覺らず。然れども善惡の業は必ず苦樂の報を感ず。

人は何故に本仏性有しながら、自ら覺らずして生死の中に流轉するやとなれば、人靈性具有すると同時に、人間に受けたる形氣の煩惱に覆はれ、仏性は未だ萌芽せず、唯此肉体を保護する処の動物欲が先に發達す。ただに本能的に動物欲發達したるのみに非ず智慧迄も唯肉体の欲望を満足せんが為にのみ發達して、高等なる理想の靈性は萌發せず。

すべて精神發達の順序に於ても、初め劣等なる植物性が發達し、次に動物性、次に精神性と發達す。同じ精神に於ても高等なる性情は容易に發揮し難し。栄養と生殖の作用の如きは植物も同じく有する性にて、五官の働きに至つては植物には無く唯動物共通の性である。眼の色を視、耳の声を聴き鼻の香を嗅ぎ、舌の味を感覺する如き動物も人類も共通の作用である。却つて高等動物には眼の闇夜

に物を視また嗅覺の敏慧なる如きに至つては人類よりも發達して居るなり。

人類は精神の中の高等なる理性また進んで靈性が働く処よりして最靈の精神生活に入るのである。道德上に於ても、人類は能く善惡邪正また權利義務と云ふことを能く諦かに判断し推察し得らるる理性なる智力を以て、我と彼とを照し合せ、それで道德上の高等なる理性の智が自らの肉慾や我慾の劣等なる慾を制裁することが出来る。此道德上の、自己を刻己し抑制する等の、高等なる徳性は能く精練せざれば發揮せぬ。

人類は高等なる動物にて、奥底に伏せる靈性未だ開發せざる間は其情操が卑俗たるを免れぬ。いかに寶石たるも琢磨の功をからざれば光輝發せず。人の精神の主我意志（本能的の我見、我愛、我慢）が我を本位とし、其主我が世俗的情操より衝動また活動して、其慾望する処のものは、世俗動機として世の中の名譽または權利財産位置等の為に動かされて、其心底の浮薄卑俗なること実に淺薄である。故に世の中に吹き荒む八風なる利害とか毀譽褒貶苦樂等の為に動揺し易し。故に其人生の終局目的な大事をも敢て自覺せんと要求せず。故に其人格を形成する要素に就ても、善縁に遇へば善に向ひ惡縁に誘はるれば惡人となる。此の如き輕毛の凡夫、六道何れとも定趣なき衆生なり。今仏教は自己の

安心決定なき、終局目的判然ならざる輩を排斥す。是れ恰も国家より戸籍なき無所屬の徒に対する如し。

宗教にては、宗教的人格の一大根本としては正しく弥陀の实在者に帰命信賴して、永恒に神の國に依止すべきの信仰を鞏固にするなり。

無上の大道を進んで、最高の人格と常住の平和に行くべき道を菩提と云ふ。一切諸仏はこの大道に乗じてすでに正覺しょうかくを成じ給へるなり。之を宗教的に云はば光明の大道である。

()

従來の我は迷にして絶対の真我ならず。現に吾人が頼みに思ふ此世界も我等は永遠に安穩なる事はできぬ。如何んぞ畢竟して所屬すべき処ならん。されば仏陀は教へ給へり。現世界は唯安樂に耽る舞臺に非ず、絶対なる常住の靈界に入るべき修行の道場たり。我等衆生に常住の安寧を与へ給ふ絶対的の实在者無量光尊に帰命せよ。

一切衆生は本法身よりうけたる靈性を有す。是金剛石の未だ琢磨せざる如し。此世界に稟けたる形氣の煩惱の垢質の為に未だ覆はれてゐる。若し専ら無量光尊に帰命信樂し、聖意に合契すべき念仏三昧に、若しは瞑想、若しは口稱くしやう一心不乱なれば、若しは頓速に若しは漸次に、心意が純熟するに随つ

て、例へば妊婦の月満ちて分娩する如くに、靈き心は生れ出でん。聖き心が生れて見れば、從來見来りし娑婆にはあれど、今まで闇の夜中に暮せしのが今は曉つて光明の曙光を見るに至り、ここに始めて絶對なる常住平和の無量壽國の人と為ることが出来て、安心の場所は得られる。実に此心の生ることが一大事であつて而かも難関である。然れどももとく仏の子なれば慈悲の懷に抱かれて温まる時は必ず出産難きに非ず。

すでに仏の子は生れても、生れた儘では未だ全体發育せぬ。慈愛の懷かしき母の顔さへ見えぬ。されども鳴く声の口に慈悲の乳房は哺まされて、次第に肥立ちて眼も見え耳も聴える如く、靈性の作用は漸次發育する。児が母の慈悲の懷に育まれるに就て斯様な話がある。有らゆる動物中にて人の児が母の手を放るるまでの年月が最長い。是には何等かの必要あるであらう。或人の考には、人の児が母の懷に抱かるることの長いのは唯形体の育つばかりでなく、母の暖な慈悲を以て人の子としての愛てふ高等な感情を養ふ為めであると。して見れば、我等如来の子も如来慈愛の懷に抱かれて、慈父の愛の如くに變化して、いと麗しき感情を成生する為めとす。

慈母の如来は我等を仏に化す。我等は父の如くに向上するを宗とす。如来は道德心を養ひたまふ慈

悲の父母として三の聖徳を以て我等に嚴臨し給ふ。三徳とは神聖と正義と恩寵とこれなり。

安心

宗教的意識の確乎と決定した常恒不動の心理状態を安心あんじんと云ふ。安心は宗教意識の生命なり。故に未だ安心決定あんじんけつぎせざるものは宗教の生活に入らざるものと云うべし。

安心の文字の解は、安心とは安置心、安住心の二義あり、また古来の伝ふる義によれば、安心とは所帰しよき、所求しよぐ、去行こぎやうを確かに思ひ定むるを云ふ。

所帰とは安置心即ち自己の宗教意識に唯一独尊なる帰命信賴すべきものを定めて、自己の宗教意識を安置する義也。

所求とは自己の精神心情の安住する処を定め置くことなり。

去行とはさりゆく、即ち人の生れつきの現在の心の安住する処は自己の迷とまた罪惡と苦悩とに係りて成立したるものなれば、この心理状態をさりとて、いと清きいと安き靈国みくにに更またり行くべき修行のこ

となり。これを猶委しく説明せん。

所 歸——歸命信賴する処の本尊。

所歸とは、宇宙間に於て唯一独尊なる一切に超絶せる処の神尊、一切万物を統御するところの靈格、万法の歸趣する処のこの唯一なる神尊に歸命するにあらざれば他に救靈の道あることなし。故に全心全幅を奉げて歸命信賴するものなり。

此唯一独尊なる神格をアミダ如来と号し奉る。仏教に諸仏ぼさつの名号甚だ多しといへどもみなアミダ一仏の分身にして、無量諸仏本源に歸する時は唯一体なり。弥陀と一切諸仏とは、たとへば一月天に在りて影万水に浮ぶが如く、百川万江の浮べる月にありて異なるにあらず。

一切諸仏は弥陀一仏の応用の化現、弥陀の靈知と靈能とによりて一切衆生を救靈せんが為めの分身なれば、本ミダを離れたる諸仏にあらず。然れども本に歸すれば唯一の独尊なれば全心を投じて歸命し全力を竭して仕えまつるべきはひとり弥陀如来のみ。

自己は無智無力ただ罪惡のみを識る

吾人自己の心中に歸命信賴すべき本尊いまだ安置せざるむかしをしのぶ時は、まことに自ら恥じ自から恐る、むかしの生れしまゝの我心情のあさましさよ。面おもてにこそあらはれね、いかり憎にくみ、嫉やま、慢たかやう、貪むさうなどのすべての罪惡の要素として心裏に見えざるなし。すべての煩惱ぼんのうの種子内に伏在すればこそ機会にふれ縁に對して競ひ起り、己を害し他をなやめ罪をつくること極りなし。さればこそ聖典には「煩惱の毒蛇睡りて汝の胸に在り黒蛇こくへんの室に在て眠るが如し」と。吾人の胸中に眠伏せるもろ／＼の毒蛇は、外界の刺激にふるれば忽ちに覺醒して罪惡を顚動す。かゝる罪惡の巨魁を主我とは名づく。此の主我を主人公として我意、私慾若しは主觀こころみに、若しは客觀きやくかんに、惡として造らざるなし。此の罪惡の源なる主我を中心とし本尊として過しゆかば、いつか迷ひの里を出て罪惡の源を斷つことを得べき。この主我を主人公として精神生活せるものを迷の凡夫とは云ふ。いまだ宗教の生命に入らざるものなり。

歸命すべき獨尊を宗教意識に安置す

さて吾人は曾て無明^{むみやう}にさまよひ魔王の奴となりて空しく貧里に苦しめるも、教主世尊の聖^{きよ}きみをしへによりて、唯一の尊なる父の大なる靈能と大なる慈愛とを聞きしより、いまは昔の非をさと悔いあらためて慈父に帰することを得たり。能く阿弥陀如来の真理を知るときは宇宙は全体如来の中にある。

如来は宇宙の最勝者なり。如来は宇宙の統攝者なり。如来は宇宙の無上權威者なり。如来は宇宙万法の一大原則の基礎なり。如来は一切を救済する大力者なり。

吾人は無知なり無力なり。従来自からの力にて活きるものと謂^{おも}ひ来りしはその実然らず。宇宙の全体なる如来に活かされしなり。我等は曾つて自から知ありと謂へり。その実は宇宙の全智なる如来より与られし外に我知あることなし。ことに我等の知のわづかなることかすかなるはたるの火だにあらざりしなり。我らは如来を離れては此身も生命も精神もすべてなきものなり。

如来は我身と生命と精神とを我に賦与し給ふことは何の為ぞや。我に永恒の生命と無上の靈界に入らしめんが為めなりと聞けり。いかにして永劫の生命と無限の光りに入ることをうべきぞ。これ己を空ふし我をすてゝ、永恒のいのちなる無限の光なる如来に帰命信賴するなり。我全心を尽して如来の真我の中に投歸没入するなり。

我が從來の主我中心の生命を亡^{むなし}ふして如来の中に生れ更るなり。如来の中に生れ更りし時には從來の我にあらざるなり。

如来の中に帰命し依屬せる我は永恒の生命なり、無量寿なり、無量光なり。

本尊

如来は光明普ねく十方世界を照して衆生の念ずる心を摂取し給ふ。

如来は我等のいける本尊なり。いま此身が太陽の力によりていける如く衆生心靈は如来の靈能によりて靈活せるなり。如来は我等がいける本尊として常に離るゝことなきなり。我むかしは未だ曾つて

知らざりき如来の大慈悲は常に衆生を攝取し給ふことを。また如来の光明はとこしなへに衆生を照し給ふことを。

いまは諦^{あきら}かに信知す。如来の光明は夜も昼もとこしなへに衆生を照し給ふことを。如来の恩寵はいつも衆生心をいつくしみ給ふことを。

衆生聖名を称ふることは如来は聞き給へり。如来を敬礼することも如来は見給ふ。衆生念し奉ることを如来は知りたまへり。

吾人むかし曾て阿弥陀經をよみ奉りて、阿弥陀仏現にましまして説法し給ふといふことは、衆生^{わん}らが死してかの国に生れて後に妙法を聞くものなりとおもひき。いまはおもふ。否然からざるなりと。今吾人に対して現に在して説法し給ふなり。

真仏甚深微妙の声は肉耳を以て聞くべからず。但心靈の耳を以て初めて無声の声を聞く事をうべし。

如来は常恒に法を説きたまへり。我が信心かたむけるととき如来の真音妙にひびけるを聞く。我悲しむとき如来は大慈悲を以て慰藉^{ぐわいじ}し給へり。我いかるとき如来は愛語をもて我をなだめ給ふ。

吾らがすべての悩にも如来の慈顔をおもひ奉らば忽ちに歓喜を感じ、いかなる逆境のなかにも吾に平和と安穩とを与え給ふ。

吾が本尊はいづれの処に於いても離るゝことなし。行住座臥にへだつことなし。吾が心に如来は安置し給ふ。

しかれども吾はまた世のくさぐさの爲に如来の照鑑みまわし給ふことを忘るることなき能はず。かの聖き名みなを称ふるとき如来は吾が心に映現し給ふ故に常にいける本尊をこゝろに安置すべきなり。吾この身心は如来の靈応を安置し奉るところの宮なり。

吾ら肉体をもてるほどは一重ひとへの障さわりをへだてゝ如来を窺見たてまつし上るなり。心眼にはさはりなきもいまだ仏眼をえざるときはまだ一分のさわりなきこと能はざるなり。

この穢身けしんをさりて仏眼開けし時、真仏如来を如実に知見することをうるなり

心つねに本尊を安置して

吾は曾て謂ひたりき。こゝに於て命終り瞑目して後初めて涅槃界に安住することをうるものならんと。

否なり。如来の真境は心靈界なり。俗に所謂冥途と云ふ如きものにあらざるなり。

此を去りて彼処に発見すべきものにあらず。吾人は生れつきの我の所感をすてゝ、正しく如来の中に投歸没入するとき如来の大恩寵に融合せるとき、従来の主我の安住する心情を超えて小我中心の生命を捨て如来の中に生れ更りしとき、已に我信心はこのまゝ如来の靈界に転生したるなり。これを有余涅槃といふ。即ちこの有余依の肉身はかわらざれども神は淨土に栖みあそぶこゝろなり。このかたちを有しながら理想の極樂に安住するなり。

このかたちを実物と認むればこそ生死の怖れあり。かたちと迷の我てふこゝろをはなれて、如来の中なる真我を我と信認するときは本来は無量寿ならずや。

肉眼に七宝宝樹や八功德池見えざればとて是極樂にあらずと云ふことを休めよ。吾人自己のはからひをすてゝ、如来を信念し清淨莊嚴の觀に入るときは七宝の靈國は吾人理想の前に彷彿たり。吾人は今は無量光明土に逍遙としてあそべり。

吾人は又百味の飲食おんじきこの肉のために味ふことあたはざるが故に心靈は極樂に安住せるものならずとはおもはざるなり。我ら我をすてゝ如来の恩寵を觀する時法喜禪悅の妙味げに極りなく味ふ事を得ればなり。吾人の口腹の味は飽くことあるも三昧禪味は微妙にしてあくことを知らざるを覺ゆるなり。婦命きふめい信賴して之に一任しこの指導のもとに奉仕することを得ば、これを所歸の本尊を宗教意識に安置し奉つるとは為す。

所

求——終局目的の所求しよぐによりて安住をうる

所歸の本尊を安置してこれによりて心靈の生活をうるを安心の一面とせば、常住の不變の靈界を求めて心情の安住する処を所求の境とす。

何故に吾人は常住の安住処を求むべきやとならば、吾人の天然の生活なる身心と現に依止する世界の規定とは決して永恒の安住をゆるさざるなり。現世界は畢竟の安心を吾に与へざるなり。

吾肉眼の見る処の世界は轉變極りなきなり。いま吾々の身は老病死苦免れざるなり。これを思惟す

る時は吾は不安の情に堪えざるなり。吾らは如何にして生死を超絶し不生不滅の真界に超生することをうべきぞ。我はこれを求めて止まざるなり。

こゝに於て、教主世尊の勅に隨うて、不死の門は開けたり。涅槃の城はあらはれたり。

聖き御名により聖き旨によりて真如の都にいたることを得、念仏三昧によりて蓮華藏界に入ることうるなり。真善美の靈界に安住することをうるなり。如来の真境に常住することを得るなり。

吾人はすべての吾同胞にすゝめて止まざるなり、とかく從來の我によりてすむ処のこゝろのすまゐ処を転じて如来の安樂土に安住せられんことをと。世の人々を見るにたとへ形骸には綺羅の美を纏うて金殿玉樓に栄花をほこるも神はつねに三惡道に流転し、即ち一念瞋恚のはむらをもやせば即ち心はならくの境界を現はしなかに墮するなり。貪欲こころを悩ますは何ぞそれ餓鬼にあらざらん。嫉憎愚痴痴慢或は烈火胸をこがし蜜水こゝろを浸す。日々三惡のなかに循環し、念々六道のちまたにさまよふ。ア、憐むべし、傷むべし。何ぞかゝるあさましき心情をすてゝ如来清淨の処に安心を求めざる。

現に今此心一念弥陀なれば一念の淨土一刻如来にあれば一刻の極樂。

極樂遠からず、今此一念をめぐらして如来のなかに安立する時即ちこれ無量光土なり。

昨日までの娑婆にすめる心機を一転して浄土に超生する時は、自己の心性一新し人格一変するが故に天地もまた一変し、乾坤もこれ昨日のそれと異れり。万物光輝を發し事々希香を生ず。

渴聞ニ般若ニ絶し思辨念食ニ無生即断し飢。

ア、樂し、げに極樂のなかに安住する心情は。ア、歛ばし、極樂に逍遙して極りなき理想のほどは。世の人々よ。何ぞよしなきこゝろを捨てゝ、この如来のみむねのなかにすみかえぬぞ。

吾人はこの有余の依身つゝよのあらんかぎりあらしは神かみは如来の極樂蓮華藏界にすみあそびて、この依身を蟬の如くに脱する時は、無依涅槃むゐねはんと云ふて実在の極樂涅槃界に歸入するなり。

去　　行

全心全幅を挙げて歸命信順する処の唯一の本尊を宗教意識に安置すべきことゝ、及び最終の求むる処なる真善美の極樂に心情を安住すべきことをば已に明しぬ。吾人はいかに心を致しいかに修行せば、従前の安ぜし処より転じてこの身は存しながら神は極樂に安住することを得べきぞ。これを去行こぎやう、

とす。

去行につきては五種聖行等。即ち一心に専ら聖經をよみ、一心に専ら如来を礼し、一心に専ら如来及び清淨国土を冥想觀念し、一心に専ら如来の聖名を称へて聖旨の現はれをいのり、靈国の格らんことをいのり、一心に専ら如来の聖徳を讚美しまた供養する等。要する処は、専ら如来の恩寵と自己の信仰とにより相互の關係を親密にし、如来の聖寵吾人の信念に靈應し、吾人の信心に如来の聖意交感し、彼此交渉、感応致一し、我れ如来に入り如来我に入り、己が心を空うし如来の聖意によりて自己の心意にみたしめ、ついに吾が心を転じて如来の聖寵によりてアナタの聖徳に靈化するにあり。

然ればいかゞせば吾人の心は解脱靈化することを得べきぞとならば、善導大師の曰く、一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住座臥に時節の久近を問はず念々に捨てざるものを之を正定の業と名づく。彼仏の願に順するが故に、と。

要する処は、口に聖名を称ふるは意に聖寵を憶念せんが為めなり。意常に如来を憶念する時は念々如来が捨離せざるなり。

行住座臥に常に如来を憶念し寤寐に之を念ふて念々常に捨てざる時は、早晚に心眼即開することを

得。

心眼開く時は即ち仏を見る。仏を見るが故に我が心と如来の恩寵と交感し融合す。如来の聖靈を感じずるが故に、従来の主我脱却し如来の聖意に変化す。これより後は如来の無作の聖意と自己の心靈と致一するが故に、たとへば泉の湧出する如く如来の泉源より自己の心靈に聖徳流れ出づ。歎喜極りなくこれよりは如来我心眼の前に現在する故に我この身はこれ如来の宮なりと知る。

心情は常に如来の光明界中に安住するが故に平和と歎喜と極りなし。常に如来に帰命するが故に、如来は常に吾本尊として照鑑し給ふ。如来を念ずるが故に、吾如来の中に安住して平和の生活を得るなり。

これよりは、この肉体はかはらねど、こゝろは菩薩聖衆ぼつさつしやうじゆの数に入り、如来指導のもとに生活々動せん。

慈悲の御親

仏を御親^{みおや}とし、衆生は子にして、これを布延して御話しいたします。

仏の御親と子の我等の間を例へば、こゝに家富み最も栄へる家庭に唯一人の男子が在つた。まだ頑是なき幼児、花に戯むるゝか蝶でも追ふて、知らず／＼門を出て、外に歩みて居り、其の人形の如くに麗しき児は、そこを通る乞食の眼に映つた。可愛き児ボーチャン、あなた蝶が欲しくば私が捕へて上げませう、と頑是なき児の憐れやつひは乞食の拐^{かど}かさるゝ処と成つて乞食の群に入り、本は門閥の児でありし豪富の児も飢にせまれば乞食の子に歸し、心と雖も年久しくなるに随つて、遂には本の生れ付の乞食と同然となる。

全体少年の功名心や虚栄心などは環境から養はれて起るものである。少年は俺は偉い人に成ると云ふものであるが、乞食の中に在りては功名心も知識欲も発するものでない。憐れや此乞食は本々光榮ある身分に生れながら斯の如きあさましき非人^{ひじん}に化して、いとしや十歳計りの時にフツトした事から遂にかやうな思想が浮び出した。あの少年衆は頓て立派な人物と成るに相違ない、我も同じ人間に生れ乍ら彼の少年の如くに人物と成ることの出来ぬのは、歸する所自分には教育をして呉れる父母がついて居らぬ。彼の子供等でも自己の力で偉い人に為ることはできぬ。全く親の力を被らねばならぬ。

然るに俺には彼等の如く教育をして下さる親がついて居らぬ。我とても人間に生れてをる。親の無いわけはない。其の親の力を被れば偉い人に成れぬことはない、胸の中に浮んだのが動機と成つて、是より親をたづね親に逢はんとの心念が深くなつた。

是までは日々の思あさましくも食ふ事を思ふ他余念なかりしに、人間性の奥に潜める心が發いて、始めて眞の親をたづね親に逢つて、親の教養を受けたいと云ふやうな眞の人間の心が浮び發つた。

されば只親をたづね、親に逢ひたいとの一念に成つてより、心を潜めてつらつら考ふるに、四五歳の時慈愛深き母の温顔が夢幻の如くに奥底より浮び出た。其面相をたどりて眞の母の慈顔に接したときが深くなつて、逢ひたさが禁ずること能はぬまでに成つた。また一方母は自ら思ふに、いかに家富み財饒なるも之を譲るべき子なく、また自ら学あり芸あるも之を伝ふべき子なきことは実に寂寥に耐へず。本より子なきなればまだしも、本我子世にありながら之を子に譲ることできず、伝ふること能はざるは実に本意なきこととて、深き慈母の胸には子を憶念して捨ることなきも、これまでは母はいかに子を念ふとも、子は母在すことさへ忘れたりければ如何とも為ること能はざりしに、今は初めて子を憶念して止まずなりぬ。親より子を憶ひ子より母を想ふ。両方の憶念が相互に念じて余念なく

無我の状と爲る時は、たとひ千里の道隔てゝあるとも相方の念が感応する時は、宛然として相逢ひ相見ること現に相逢ひ見るが如し。

我らは靈性は具すれども未だ開けず只肉の我ばかりを愛してはしなくも六道の乞食と爲れり。未だ曾て靈の御親在すことを識らざりしに、念仏三昧に、仏なる親を念じて、如来は眞の我が父母にてあればこゝろを離さず。如来はつねに我々を憶念し給ふ。我等一心に御親に逢はんと欲して慕つて休まざれば、髻鬘として現前に在すことを得。若は現在にも、また当来にも、大悲の温顔を拜し、慈悲の御顔を瞻むときは、また慈悲の御聖意をも知ることを得らる。仏を見たてまつれば、本々仏より受たる仏性は久遠劫来御離れ申していまだ御名をだに聞くことなかりし如来の眞実の慈父、其御親が満腔の慈悲を以て我等を愛しみたまふと聞いて、我等いかでかミオヤを欽慕恋念せずして居られやう。一心に「我はただ仏にいつかあおひ草心のつまにかけぬ日ぞなき」と恋ふる時、初めて心眼開けて慈悲の面かげに接することを得るなり。親を離れて子どもの成長することはできぬ、我等の心靈も如来を離れて育つことがたし。

世に一つ御親の眞実在すことを識らずして、人生を闇の中に暮してまた闇に入る人ほど不幸な者は

有りませぬ。依つて同胞衆に誠に／＼吾同胞衆に一に御親の聖意を御知らせ申して、皆さんがミオヤを真に御慕ひ申して親子の対面なすやうに（離れぬやうに）して上げたいと存じます。

愚納が吾同胞衆に対して、どうか我等迷ひ子を深く御意にかけ給ふミオヤの聖意を御知らせ申して御相見させたいと存じます故、ミオヤは可愛き御自分のほんとの御子たちを、何ぞ闇の中に迷ふて居るものを放つて置かうと思召されませう。かくまでに子を憶ふ親に御会はせ申したいと云ふ事につきて、楞嚴經の勢至菩薩の円通の告白を紹介します。勢至菩薩のミオヤを御慕ひ申なされて、つひに深き心の奥底より慕ひ申たる結果心眼開けて、ミオヤに対面して自然と無生忍を悟りなされた因縁であります。夫は先づかやうな因縁であります。

釈尊が一時舍衛國に於て楞嚴經を御説きなされた時、此の經は衆生の心源真如の深義を明しなされたのですが、其中に、

如来甚深の妙理を聞いて諸の迷の本源を明らめ、菩薩三摩地により無生忍をえ仏の開示をかうむりて心身皎然。爾時に世尊が普ねく其会に集れる諸の菩薩や大悟せる羅漢等に向つてかやうに告げなされた。今汝等は現に菩薩の無生の悟りまた羅漢の果を成ずるのは、例へば悟の花が開き果を結んだの

である。されば此の花を開き果を結ぶに對しては過去に於て初め発心し聖の種子を播いた時が無ければならぬ。或は耳より聴いたとか、また眼より視たとか、意に念じたとか、其の悟の道に入る門は各あつたらう。其を此大会に其が本と爲つて今已に円通と爲つて悟に入つたと各自の入門の因縁を告白したならば、初心の輩の爲に眞門まゐりに入るの方便となると。

如來の命を被むりて第一番に座より起ちて仏前に出て恭敬礼拝して告白したのが、仏の最初の御弟子たる阿若憍陳如等五弟子であつた。廿五番の最後の告白をなされたのは觀世音菩薩であつた。廿四番目に勢至菩薩の告白が今我同胞に紹介いたし度いのであります。

勢至菩薩左なきだに自己の胸中に弥陀の慈悲にあたまめられて、燃ゆる如きの信念を以て、願くば世の同胞等を誘ふてミオヤの光明の中に引入れんとして居る勢至王子なれば、世尊の勅命を被むりて争いさでか黙して居られやう。従へる処の菩薩等と共に座を起つて仏の前に進みなされて、其装は実に嚴かに真金の色鮮かに六八の相鮮かに、百福の莊嚴を以て莊嚴せる人格の巍たいき、青蓮の瞳丹花の唇を動かして朗かなる音声を以て、世尊の前に跪き、仏の足を頂礼して、恭敬合掌して、丹花の唇動かして其音声嘹々として、仏に白まをすらく、世尊我過去の往昔を憶ふに恒沙劫こうじやくのむかし、仏世に出で給ふて無

量光と名づけまた超日月光如来と号^{なう}け奉る。我初めて其如来世尊に瞻^{せん}仰^{やう}し奉る時、彼の如来は我に念仏三昧の法を教へ給ひき。譬へば人あり、兩人の間に於て一人は専らに甲の人を憶へども乙の人は甲の人を毫も相憶ふことなし。かくの如くならば、若しは遇ひ若しは遇はず、或は見たり或は見るることなし。兩人相互に愛念して遇はんと欲する念ひ深ければ生より生に至るに影と形の如くに離れずして相遇ふことを得るが如く、如来は全く一切衆生のミオヤに在ませば一切衆生の子を憐みて毫も相離れ給ふことなし。

母の子を憶ふ如くであるも、仮令いかに情深き母我子を忘れず憶ふとも、若し子の身が母の許を逃走していかに憶ふもいかんとも為すこと能はず。子が若し母を憶ふこと母の方より子を憶ふ如くに深ければ、母と子と生を歴ても相逢ひ相見ることを得る如くに、若し衆生の心にミオヤの仏を憶ひ仏を念じて忘れずば、現前にも当来にも必定して仏を見^み上^あり、仏を去ること遠からず、方便を仮らずして自ら心開くことを得ん。譬へば香に染める人の身に香氣あるが如し。此を則ち香光莊嚴^{かうくわしやうあん}と曰ふ。

威神光明最尊第一

斯文は宗教に於て先第一に知らなくてはならぬ宗しゅうを標ひょうされたのである。宗に三義あり。独尊。統攝とうしやく。歸趣。

独尊とは宇宙間に絶対的偉大なる力を有てる唯一無比の尊き者の存在するを信認する、それが自己の活ける本尊となる。

他にくらぶ可き物もなく絶対的に尊く此尊の外に全く帰命きみやう信賴すべきものもなく、亦我を畢竟して救済し給ふ者は此の本尊の外に有るわけではない。仏教に十方三世の諸仏一切賢聖と云も悉く斯尊の分身にて此の尊を以て本地とす。一切諸仏神明の本仏なるが故に威神力も光明も諸仏の及ばざる所である。故に独尊と為す。

統攝とうしやくとは宇宙間の一切方法を統すべて摂理し給ふ権能在ます如来なり。是一切方法の中枢にして一切の法則の行はるゝ中心は即ち如来なり。一切方法は此の如来の一大法則に摂理せらる。一切諸仏聖賢

も悉く皆弥陀を中心とし弥陀に依て統治せらるゝものとす。是如来は一切諸仏万法の中心なることを明す。

帰趣きしゆとは一切万行の帰する処諸仏の教ゆる法に則りて行爲するを仏行とす。真善美の靈界に帰趣する行なり。一切諸法万行八万の波羅密菩薩の向上進化の終局は即ち阿弥陀仏国に帰着するにあり。阿弥陀仏国は無上涅槃界ねはんにして一切諸仏も終局は涅槃界に帰して安住し給ふ。

阿弥陀は一切の万法の根本諸仏の本地にて、また一切万法の中心にて、一切万行の終局の帰趣する処なり。過去一切諸仏弥陀三昧に依て成仏す。

亦楞伽經りやうがきやうには十方三世一切法報応仏菩薩は悉く阿弥陀仏国より生ずと。

宗教には、宇宙唯一の独尊を認信して之に由て救を求る本尊とすべきも、凡夫の窺うかがひ知る処にあらず。此に於て大聖釈尊我らに示すに、無量寿仏威神光明最尊第一にして諸仏の光明能く及ばざる所と教へ給ふ。

如来は我等一切衆生の唯一の大御親に在ませり。斯御親の外に我らを救ひ給ふ者有ることなし。宇宙唯一の大御親を真実に信認して毫も疑はず、斯如来に絶対的に帰命し信頼してついに変ぜざるに至

るを安心已に決定すと云ふべきである。

若し阿弥陀如来も一切諸仏と同一にして諸仏の随一と認^み做^なす如きは、未だ宗教の真理を得たるものでない。全く之諸仏の本仏にして独尊、絶対無比の独尊にて一切諸仏を統攝して一切万行の終りなりと信ずるを宗の真義を得たるものとす。

如來性、世界性、衆生性

大御親は正しく存在する哉と心の闇き子は疑ふならん。宇宙は全体通じて仏教にて法身毘盧舍那如来と云ふ。これを大御親と名く。宇宙は地水火風空の物質と識大の心質と、物心二質も其の実は無碍の一体にて、吾人は此の分を受けて身体と精神とに現はれて人をなしてゐるのである。宇宙が一体の大御親であるから天地万物も一切衆生も皆其子である。宇宙全体大御親に比較したならば数にもならぬ地球の其亦地球の寄生物の如き人類さへ、精神発達して種々の大御親が秘せる地球自然界の事理を悟つて種々の発明をなすに非ずや。況んや其の大本源なる大御親に於ける甚深不可思議の御状態はと

ても人間の智識などにて測り得べきものではない。

人はいざ吾人は大宇宙には実に絶対的不可思議の大靈の存在を仰がざるを得ない。実に法身無量壽にしてまた無限の大光明者と信ぜざるを得ない。また宇宙は是法身無量光にして其の不可思議なる、吾人が肉眼に現れる自然界にも日月星辰繋りて此宇宙は実に無限にして辺際も分界もなきものなるを信ず。肉眼に対する自然界既に広大無辺である。況んや心眼の対象なる心靈界の微妙不可思議甚深の理に於ては、何とも名状すべからず。教祖が華嚴經等に言を極め義を尽して演べ給ふ其の仏境界の甚玄不可思議なる消息は、吾人の如き浅劣の徒と雖も、心靈的実験に於て、靈界の妙は実に言語の及ばざる処なるを識る。況んや大聖人の天眼に經驗し給ふ処の宇宙心靈界の消息に於てをや。華嚴經の説の如き何ぞ夫れ荒誕の説と云ふべけんや。

吾人は此地球上の寄生物なる肉の身を以ては微妙ならざれども、内面に有せる靈性は是れ大法身無量光の分子として仏性の存するあり。之を開けば六合に亘り大宇宙と合一する性を有せり。以て仏説の真理なるを信じ、而して其の靈界に逍遙するを以て人生最上の慰安とす。世の文運開け此の身に於てさへ地球上を旬日に一週するにあらずや。富者は恣に世界を遊覧するにあらずや。吾人苟くも靈

界に心を用るもの心靈を欲しきがまゝに十方の清淨国土に逍遙せしめ、無數の大聖人と手を携へて樂むことを願ふことなきことを得んや。是大御親の賜として感謝せざるを得ぬ所以である。

大御親は絶対無限、無始無終、永恒本然、精神とも物質とも分つべき能はず、宇宙大心靈即ち法身無限光と名く。宇宙は一大靈であるから人間に比して智慧と意志の如きなかるべからず。之は一切所に満てる大心靈の智と意志なれば、一切智とも一切能とも名くべし。一切智と云ふも人類の如き分別思慮の智とは云へない。自然界中に存在して人間から云へば実に完全なる理性の如くに認めらるゝを智と名けたのである。即ち天地万物の中に整然たる条理あり、秩序あるは事実なり。天則に行はるゝ万物中に一切智の理性存すと云ふも不可ならざるべし。また万物の生活し運動する勢力あるは大宇宙内に意力の存在と云ふも然らん。

此の法身本有の無限光は絶対なれども、親子の区別と關係とを説明せんには、宇宙間の本源と万物にわたりて先ず三性に分ちて親子の因縁を示さん。三性とは如来性、世界性、衆生性なり。

如来性とは又神性とも云ふべし。即ち宇宙の本体、一大心靈態、法身毘盧舍那ほうしんびろくしゃな、絶対無規定にして万物何れの物も対比すべきにあらず。また法身如来は因縁に規定せらるゝものにあらず、相對に約束

せらるゝものは成ずればまた壊し、生ずればまた死し、生滅変化極りなし。絶対は本然永恒の存在にして他に規定せられず、本然自爾の体なれば、生滅変化なし。之を如来性と云ひ、一切万法の所依とする処である。これを円成実性えんじやうじつしやうとも云ふ。円は円満絶対無限の義、成は本然自成にして因果的に成ずるものにあらず。実は真実本有の靈性なれば即ち円成実性と名く。是即ち万物の大御親にして吾人はこれを法身無量寿如来と号す。

世界性とは、世界とは十方三世の形式因縁因果的に成ずる処の性にして因縁和合性とも云ふ。世界一切万物は因縁の相互の約束によりて成り、また種子より萌発し実を結びて又種となる如く、因には果あり果には又因あり。是の如く万物此關係によりて行はるゝを世界因縁性と云ふ。

如来性は絶対無約束、世界性は相對相互の因縁の約束によりて成る。そこで其の關係は世界因縁性の万物も其の所依の根拠がなくてはならぬ。其の根拠は何を以て為すとならば即ち如来藏性であり、絶対実性である。

宇宙の大靈が自己絶対なるもの、いかにして因縁性の世界性現はれたのであるか。大靈自体は絶対なれども大靈に常恒不斷の活動力あり。即ち一切智能の働きによりて現はれたる一面が相對の因縁の

世界性なり。大靈自己は絶対なれども現象は相對なり。大靈自己中の相對現象が世界なり。

絶対と相對の世界とは一体の本体と現象なり。絶対の一切智一切能、世界万物中に内存して、内面より云へば一切智、智の秩序が外部より見れば因果的に出産せられ、一切能の遍動力が、世界の生産活動の動力と現はる。世界万物は無明の盲動的に生産するものにあらざして、整然たる秩序、即ち内外面の因果律ありて、すべての有機物に在りてこの一切智能の認めざるなし。

次に衆生性しゅじやうしやうとは、世界即因縁因果の關係により産出されたる動植の有機物一切の有機物に通じて種々無量雑多の種類に分れたれども、同じく因縁因果の律によりて生成せざるはない。仏教に因果無人とも云ふ。そは人類なるものも因縁和合の上に成立したるものにして、その因縁和合を離れて見れば、本の元素のみにては人間ではない。一切有機物に通じて同理なり。元素の種々の因縁和合の上に動植物も成立す。故に一切衆生は因縁所生の法である。然らば人間も因縁因果の法より造られしものである。因縁の關係は実に複雑である。故に種々無量の種類料部に分れたのである。因縁關係で種々に形相を変化し、また因果の關聯にて遺伝す。之を衆生性と爲す。

然らば人類の如きも因縁律を離れては生成せず。故に世界の万物因縁の所生である。世界性因果の

理法が親である。然るに其の因縁なるものも本絶対大靈を体とするが故に、衆生の本源には絶対の大靈を父とす。大靈の分れなるも、現在より云へば世界因縁の所生の子である。故に大靈の孫である。靈性は大靈の分れなれば子たる資格を失はず。

衆生の大靈に稟けたる靈性は伏能として存し、世界所産の肉体の分は先に発達し、また大靈の分れとし、大靈の智と能の分たる衆生の精神発達の順序は、意志の運動、生理的に動く方が先に発達し、智の分なる精神の智力等は後に発達す。

一切衆生の本来如来性を本として、世界因縁果の複雑極りなき雑多の性を受けて人性をなすも、靈性は伏能として形体の方面先に発達す。

大靈大御親は絶対なれば本一体なれども、其の常恒遍動のはたらきに於て、一方には一切智と一切能のはたらきによりて産出する方面の世界として、即ち万物因縁因果の關係に成立す。其の因縁の所生なる衆生性は因縁自然の律によりて、初めに極小より漸次進化して衆生性を円満に発達せしむ。次は地上の生物界一体に通じて、原始の極小なる生物より因縁の關係上次第に進化して遂に人類となるに至る。又個体としても然り。人類にても初胎児が精虫の極小より養はれて円満なる人体となるに

至る。

大御親は、斯の如く一方に向つて一切智能に依つて世界に生産したる衆生界を極小より進化せし如く、更に円満なる人格とす。若し生物を産出し進化せしむるは、終局目的ありとせば、いかにして大御親は円満なる自性中に衆生を攝取し給ふや。

大御親は右の手より相待の世界に向つて蒔いたる衆生を漸次に向上せしめて、終に左の手を以て高等なる靈界に攝取し給ふ如くに觀ぜらる。高等なる宗教の示す所は如来の絶対なる常恒不變の靈界に歸趣するを目的とすればなり。仏教の教ゆる所は衆生の靈性を開發し、煩惱を解脱し円満なる靈体に達するを趣とす。

終局目的に攝取せらるゝ法則。

大御親は、直接に衆生を産出せしに非して、世界性を發展し世界性の因縁の法を以て衆生を生ぜし如くに、絶対の大靈は直接に衆生を攝取同化するにあらずして、因果の理法を以て衆生成仏の階梯を立てしむ。因縁に約束せられし衆生は、因果的に約束を解くにあらざれば理に協はずとし、大御親は因果の法に順つて、世界に出現して衆生救度の道を示す。報身仏即ち是なり。

能摂のうとくの報応しよふ仏と所化の衆生界とは同じく因果の法によりて顯るゝも、其の性質に於ては相同じからず。衆生は一切能と云ふ意力の方に、一切智は有れども、所生の衆生には意志の方が先に發達し、即ち人生の真理を悟り能はぬ。生理の方のみが發達して居る衆生である。如来の右の手より蒔出されたる子である。

報応二仏は、左の方より、一切慧の光明方面より、因果法を示して、衆生を攝取して靈界に歸らしむる為に顯れたり。衆生を離れたる大御親は本絶対的の一体なれども、左右の働きを分けて三身の説を以て大御親の働きを説明せば。一、法身。二、報身。三、応身。絶対独尊の大御親が方面を分て顯れたる身とす。

法身大御親は、自然界に向ひ因縁性の世界に向つて、万物を開展し生産するは、天則秩序を以て万物を律するの身なれば法身と云ふ。法身としては天地万物の理法を為さしめて、衆生の身心四支五官よりすべての生理の法を具へて、また万物に法則ありて行はれしめ、因縁の世界には終局の目的に靈界に攝取する理法あるが如くに、法身は衆生界を進ましむ。また生物は進化の終局は靈的生活に入て靈界に歸ることを得らる伏能具備せしむる如くに觀ぜらる。天地万物の備を以て衆生を極小より向上

せしむるは法身の性なり。

次に報応二身は衆生を終局に摂取せんとすの御親の慈悲と靈力の現はれなるを信ず。報身としては、因に法蔵の大願を示し、果に十劫正覺の報を現し、因果の世界に顕れたる如来なり。また衆生が如来に歸命信賴すれば其の心に報ひて顯れ、また摂取同化の徳を施す。報仏は天に在りて衆生に儼臨し、太陽の照す如く。応身は地上に出で、報仏の光明を仰がしむ。一方は天の淨界に在りて衆生を照臨し、応仏は地上にありて衆生に教へて如来に歸せしむ。之を釈迦しほ此方こなた發遣はつせんと云ひ、また弥陀即彼国来迎と云ふ。彼は天仏として衆生に照臨し、此は人仏として懇ろに教へて歸せしむ。斯く二身に分れたれども同一の大御親なり。

靈に活きる念佛

宗教心を成立して宗教的の目的を達せんには安心あんじん、即ち心の安置すへおちかたが大事である。此安心にして過たば起行の功果なし。光明主義の念仏安心は一心に念仏すれば如来の光明を蒙りて摂化せらる、即ち卵の孵化かふくする如くに我人の心霊が靈活す。即ち信心が生れ来る。如来慈悲の光明は念仏する処に加はり、如来の憶念衆生と衆生の仏を念ずるあたゝかなる処に心霊が孵化す。その念仏するに就ての安心が、必ず一心に念仏する時は心霊復活すと信じ、弥陀は我等念仏衆生の心霊を靈活せしめ給ふと深く信じて念仏する時は必らず靈に活き、靈に生るゝこと必せり。安心が信仰の死活を致さしむ所以こゝにあり。若し念仏すれば現世には別に心靈上に及ぼさざるも、死の覚悟となると云ふが如きまた死後の往生だけを期する如きは、即ち安心が人の心霊の復活を妨げて心霊的に死なしむ。故に安心は例へば彼の催眠術の闡示に類す。術者が被術者に対して、汝が病氣は必らず治る、汝を活すと闡示すれば、被術者も之を信じて必らず其病氣治す。若し反対に汝が病氣治せずと闡示を与ふれば必ず全快せ

ず。此圖示は人の信仰を死活の何れかに分たしむる所以。また家庭に於て其子女に対して汝は善くない、汝は意気地ないといつて意気地なし／＼と、つねに何事に就ても意気地なしと咄^{はな}して計り居る時は、つるには其子の為めに自然と圖示と成りて、其子は性質を変化して全く意気地無しに化して仕舞ふ。其と反対に汝は敏利^{びんり}なり、能く汝は気がつく、汝は気が敏^{びん}いてをると其圖示を以て精神を引立てる時は、其子は全く敏捷^{びんせつ}の性質に化すと云ふ。

されば世の宗教家が其信者を靈的に活かしまた靈的に死なすかは最も大事な事なり。今日世間の教家の伝道宣教の法を見るに全く信者を靈的に殺してをる。靈的に活す伝道家無きは慨嘆の至りなり。されども光明主義は人を靈的に活す為に道を宣ぶ教を布く。苟くも人の心靈を活す圖示に非ざれば与ふべからず。彼の死的伝道者の如く人の心靈を殺すべからず。不殺を戒と誠めながら心靈を殺す罪五逆よりも重きことを自覺せよ。

人を靈的に活すことに努力せん、靈に活きたき者は我に來れと叫ばん。

念佛三昧に明鏡を磨せよ

念仏、南無の一心の対象には弥陀常に現在す。弥陀は必らず在せども衆生心想の鏡曇るが故に現前せず。然らば云何にして一心の鏡を明浄にして如来の身色相好（さうごう）を映現することをうとならば、衆生鏡を磨くは只だ念仏三昧のみありて能く心鏡を磨きて明浄ならしむ。

念仏三昧とは衆生の一心と如来心との合一的其両方の間に寸隙もゆるさざるなり。念仏三昧の能く純熟する人の心は明鏡の如し。然るに其修練の一心の用心に於て巧妙なる者と拙劣なる者あり。例へば鏡は磨くに巧拙あるが如し。また能く剣道の達人能く奥妙に達する者は一寸また五分の隙を見せずと云ふ。全く物我無二となりて、如来と我と合致して寸隙なきに至る。其枢契の機は深玄言語を以て伝ふべからず。世の宗教的天才なる者は其本能的に一心が対象の境と契合して自づと三昧の境に入ることを得る者なり。然るに天才の人は稀なり。たとひ宗教素質に乏き人にも一心に自己の業障の甚深なることを自覺し尅已摧励して、一心に勇猛精進にして不屈不撓ならば、必らず従來の不靈態なる

己が心機を打破して、奥底に潜伏せる靈性現前して一心の明鏡明浄に為らん。故に天性拙なりと雖も必ず自棄する勿れ。また縱令天才豊富なるも一心に摧励せざれば真実の妙をうることはせず。

心 本 尊

吾人の宗教的意識の内観を暫らく告白せば、行住坐臥に於て一切の処一切の時に於て、フト自己の唯一なる如来を念ずれば、無上尊なる如来は威神ゐじんぎぎ巍々として靈体に在ます。之に対する観念は神聖にして自然に帰命頂礼の念禁する能はず。如来を憶ふ時は、夜半床中に臥すとも、神聖にして儼臨し給ふ御前に自ら低頭し帰命の念に耐へず。また須臾も念じて如来の慈悲円満の尊容、笑顔の赫々たるを思念する時は、身心融液にして不可思議の感あり。

また夕陽の赫耀として光る時に西方の空を心眼を以て瞻望する時は、弥陀の慈顔じげん赫耀げくやくとして、青蓮の眸まなこ、丹果の唇が、心眼の前に現はるゝ時は、身心融朗にして靈感極りなきを覚ゆ。

円光徹照せる真金色、端正無比なる尊容が心眼の前に現はるゝ時は靈感言語の及ぶ所にあらず。

恭敬と愛慕

如來を無上尊と尊崇し常に如來を愛慕して止まざる信念の心理には、相反せる二つの心理が活動してゐる。如來に対する敬と愛である。

吾人はいかに考ふるも宇宙間に絶対的に尊崇して眞實に無上の恭敬を捧ぐべき対象は唯一である。

此は絶対的の尊なるを以て他のすべてに比すべきものはない。尊崇性を以て如來を無上尊を恭敬する時は、尊敬は如來と吾人の間を、なれ近づくことを免るさず。尊敬は益す進むに随つて如來は高きにつきて尊み、自己を卑下して謙遜す。然る時は尊敬は敬深ければ深きに随つて距離が大きくなる。宗教上の愛慕の情は其反待に如來を愛慕憶念して益す深厚なるに随つて益々接近し相抱擁して融合の状態に到らざれば止まぬ。敬は昵^{たて}み近づく、愛は親みて遠ざけず。

此両の心的活動は反待にして、一は昵まず一は離れずして反待にして、而も両者は宗教上の好一對の心的活動にして、左と右との如く、相待にて完き宗教心を成す。如來は絶対無上尊にして無上の尊

敬を払ふほかまた如来を愛樂する情は進むなり。然れども世に敬有つて愛なきあり、愛して敬せざるあり、また敬愛共に行はるあり、宗教心は愛と敬と共に活動して始めて眞の価ある宗教心となる。

光は心靈を愛育し給ふ力

吾人の常恒に内觀的本尊と為つて、吾人の信仰の対象として、常に吾人の宗教心を導き給ふ者は宇宙唯一の弥陀尊にて在ます。吾人が宇宙の中心本尊は無限の光にて永恒の生命なる無上尊なり。

如来は神聖と正義と恩寵との靈徳を以て常に吾人の頂を照らし給ふ。神聖に対して吾人は眞に威神光明侵すべからざる感あり。是吾人の尊崇性を照して帰命頂礼せしめ給ふ威力あることを信ず。吾人は神聖なる智慧の照鑑の光にて正知見を与へられて、如来の聖意を以て吾人の意志とし、吾人の神聖の光明の中の行為は如来に向うて、真善美の極致に向つて進趣することを得。

正義は、如来の聖意は惡を捨て善を選み、邪を捨て正に帰し、非を避け善に就かしむる勢力なり。故に吾人が此靈性に照らさるゝ時は自然と聖意の如くに如実に如来の聖道に進むことを得。

恩寵としての如来は慈父や慈母のその子に於ける如く無上の慈悲を以て吾人を愛護し給ふ。此靈徳に對する時は実に有りがたく感じられ、またいとあたゝかなる慈愛に抱擁せられて自づと如来の愛に融合す。此靈徳は吾人の心靈を愛育し給ふ力なり。

我等が信仰する如来は吾人が最も尊崇すべきまた最も愛慕すべき人格的神尊なり、如来正義（威神の光）を以て吾人に儼臨し給ふ方より見れば、最も尊敬すべく実に如来は神聖にして侵すべからず。吾人は如来の神聖なる光の宇宙間一切の尊き格がたよりも尊く絶対的に尊きを感じ。こゝに於て吾等が真面目なる宗教心は絶対的神尊の如来に對する尊崇の心に依て成立す。

如来は我らが最も愛慕すべき人格尊なりと感ず。如来は恩寵を以て我等衆生を愛し給ふこと母の子を思ふよりも甚だし。我等が心靈の仏性は元より仏の子なり、また仏の子たる靈性は只如来を愛慕し憶念する信仰に由てのみ育つなり。

念　　佛

念仏は大乗仏教の宗教的意識の最大事である。一切万行は是より出づ。一切諸仏は此念仏に依て成仏せしと經に示されてある。念仏とは念ずる人と如来と共にして離れぬ意義である。念と云ふ文字は人と二と心にて即ち二人離れぬ心を云ふ。世に念頭に繫ると云ふは、自分の外に他に或物に対して其胸臆に往来して離れぬことである。例へば孝行の子が常に其父母を憶ふて念頭に捨てざる如く、人は本心に愛する人をば忘れんとしても忘れられぬ。詩經に中心之を嘉みせば何の日か之を忘れんと云やうな工合に、終始其念頭に在て離れぬを念と云ふ。今念仏とは自己の心裡に今世後世を通じて生命を献げて信愛する弥陀尊を常に念頭に戴きて、離れぬを念仏と云ふ。即ち仏念ひの心である。絶対的に尊きすべてに超て信愛する如来を、常に頭に戴きてをることである。観世音菩薩が御頭にいつも弥陀尊を戴きて在すのは、其意味を表徴したのである。

観世音菩薩はすべての念仏者の先達にて、念仏する人は誰人もかやうに為れとの模範てはたを示しなされたのである。観音菩薩の頭（精神）には弥陀如来が威神光明赫々として照鑑し給ふことを信じなされてをる。其胸の裡は常に弥陀の慈悲に充たされてをる。何人も弥陀の慈悲に満たさるゝ時は大小はあれ観音と為るのである。観音の念頭には永しへに弥陀如来が離れぬ。弥陀の光明に靈化せられた人格

が即ち觀世音である。今の念仏者は生れた許りの觀音である。

念仏者の心頭には最も尊とき弥陀尊が常に真正面に在ますことを念ふ時は、縱令肉眼にて人の面貌を見る如くに視へぬからとて、心眼の前に威神光明の如來が實在するを念ずる時は、肉の形に見ゆる人よりは優に尊とく有難く思はるゝ。本より眞の如來は肉眼にて瞻めるものではない。觀經に如來は是れ法界身にて一切衆生心想の中に入り給ふと。夫を聖覺は法界身とは肉眼にて見べきものでなく意識の対象にて即ち心眼にてる觀べき尊体であると釈された。

如來は本來大靈体にして實に一切の処に何れの処にも在まざる処はない。但し人の信心の鏡が明かならざる為に影現ぜぬ。如來は靈体にて色心不二である。一方より見れば大智慧の光明として徧ねく照り渡れり。また一面よりは何とも云はれぬ麗はしき妙色相好身と現はれたまふ。故に衆生の一心に念仏して信心の鏡だに明かになれば、或は麗はしき相好身と現はれ或は大慈悲として有がたく感ぜらる。經に衆生信水澄む時は仏日の影映ると。如來は常に念ずる人の真正面に在ます。但自己の心水が濁りてをる故に分明に現はれぬ。信心の水さへ澄む時は必ず明にうつり来る。

然らばいかにせば信心の水が澄むやうに為ることになる哉との問題が起る。そは他なし、唯一心に

念仏して心々相續し、念々に仏を念じて不断なる時は、必ず信心の水澄みて如来は我心水に宿り給ふに至る。經に如来光明威神功德を聞て至心不断なれば心の所願に隨て光明の中に生ずと云も其意義に於ては同一である。読者諸君よ、諸君の日常の胸臆に多く往来してをる物は何物であらう、どう云う事が常に念頭に繋つてをります。あなたの心を誘なうて高く／＼清く／＼仰ぐも畏こき許りに向上させるやうな事は有りますか。若し念頭に弥陀を離れたならば貪瞋五欲の想のみで有りませぬか。經に一人一日の中に八億四千の念ありて、念々の所作皆な是れ三塗の業と説給うてある。そこで未だ信心の光明を得ぬ間は日々に闇の裡に三塗の業を造りつゝあるも夫が分らぬのである。

いかゞでせう諸君、元來人間の生れたまふの心は本劣等な本能的な動物性なのである。之に加ふるに五塵六欲の塵埃に惹れた心は実に淨いものでない。毎日胸の中に往来する念は貪慾の餓鬼瞋恚の地獄愚癡の畜生の心を以て塞がれてをるでは有りませぬか。宗教上より云はば人間の最も貴重なのは自分の心念の向け方と働き方のいかゞであります。地獄を造るも仏を造るも、日常の心頭の働らきを本と為るのであります。そこで衆生は本來心の奥底に仏性を具有してをるけれどもそれは未だ鶏卵の如な物なのである。爰に於て此仏性の卵をあたまめて仏子と為るのに唯一の法は念仏ばかりである。念

仏とは仏を念ふ心なのである。我等が口にナムアミダブと御名を呼ぶ時に、心の真正面に最と尊とき弥陀尊が威神の光明赫々と照らし慈悲の尊容我を見そなはし給ふと想ふ時は、いかに我らがあさましき心も、自づと正しくせざるを得ぬ。実に我らは弱き者、自分の心のみでは闇の中に罪を造る外はなき物である。唯神聖なる如来を念ずる時にのみ初めて仏心我に來りて我心と為り給ふ。

如来は念仏者に対して増上縁きじやうえんと申して非常な大なる力を以て助け給ふ。例へば我らは或縁に触れて勃然として忿いかりを起す時にフツト気づきて仏を念ずる時、尊とき如来は大悲の笑顔を以て我面前に在ますと念はるゝ時は、いかに我らが忿怒ふんねも自から和らやはがざるを得ぬ。また我等が事に依りて悲しみに耐へぬ寥さびしさにたまらぬ折も、口に御名を称へて大悲のミオヤを想ひ奉つるとき何とも云はれぬ有がたさと歎びとが胸の中より湧出し、無限の慰安を与られる。実にいかなる事にも増上縁と云ふ強き力を以て助けて下さる。

我らは弱き凡夫である。必らず大悲のミオヤを離れてはならぬ。其大悲のミオヤが我らが念頭に往來して我を助け給ふ其心の表現が即ち称名の声である。其称名の声を発する心の奥には大悲のミオヤが在ます。念仏とは自己心中にいと尊とき一りのミオヤの在ますことを申すのである。

火と炭との喩

時は嚴冬の寒さの極みなる頃に座敷の隅の火鉢の中に火がカン／＼と燃えてをる。而すると誰人も寒さに耐えぬから遠慮なしに両手を其上にかざしてをると、自づから全身が暖かになる様な氣持がする。あの火鉢の中の真紅まこうな熱い火がいかにでせう。未だ火鉢の中に入らぬ前炭箱の中に真黒な而して冷たい炭で在りし折は、何人も顧みる者もなかつた。若し之に手を触れば意地悪に手に黒く染つく。されば誰人にも嫌はれる性質を持て居た。然るに其が一旦火鉢の中に入りて火と結婚して相互に抱擁して同体一心とも為つた後には、不思議では有りませぬか、性格が丸で一変して忽ちにアノ真黒な面は變じて春の弥生やよひの桃の花よりもつと紅くれなるの色と為り、元は愛嬌あいさうのない冷たい炭が今度は非常な燃つく様な愛嬌者と為りて、而していかに高位な方にもまた卑賤な者にも分け隔てなく同じやうに暖ためてやる。されば何人も其温かなる愛嬌と同情とには引つけられて、手をかざしてをると、さうする

と不思議な事には今までは蒼白な顔をして指先のかちけて居つた人も、忽ちに元氣が復活して顔は紅を催し指は自由の働らきをなすやうに爲る。また元は炭には冷水を沸す力は無かつた物が今は冷水をも忽ちに沸湯にえと化し飯をも有ゆる料理をも勇ましく煮あげる能力を持つやうになる。さればこそすべての人に歓迎せらるゝ物となる。

諸君よ、私共の胸の全部を占てをる煩惱は炭である。直に腹を立てる、ネヂクレル、ヒガム、取越苦勞をする、また食ぼる、実に有ゆる弱点を持て居り、而して我れが／＼とガン張つてをる。自分が意地の悪いくせに、若しも他人が自分に対して誉めもせぬとかまた親切にせぬと直に不足に想ひながら、自分は他人に対して毫も親切や同情の暖みのない冷たい私共の心の炭である。若しも手を触れば直に黒く染つく如くに、私共は他人の悪い事を人に聞かせ、悪影響を他人に染つけやうと爲る氣分を持てをる。実は私共の心は煩惱ぼんのうの自分勝手な仕方のない奴であつた。然るに私共の煩惱の炭に弥陀大悲の火が燃つく時は、忽ちに心が一変して心の色が紅蓮花くれんけの如くなる。されば經に念仏する者は人中の妙好人めうこうじん最と美しき蓮華と誉めたまふ。念仏して弥陀の大悲が我らの胸中に燃つく時は、有がたと歡喜とがカン／＼と燃あがり、実に歡喜踊躍の状態と爲りて燃ゆる。心念の能力が出る。經に斯光

に遇ふ者は三垢消滅し歡喜踊躍とあるは是である。また炭の働きのて煮焼の働らきを為す如くに如来の恩寵に充され感謝の念に動かされて日々の所作も勇ましく働けるやうになる。火より蒸気を発して非常な力を為す如くに、弥陀の恩寵の火が我らの心念に燃えつゝある時は人格が一変する。身も心もすべての形氣の悪質が靈化して、如来の聖意を自己の意と為し、慈悲に同化し親切な心を以て他人に待し得らるるやうに為る。

然して見れば我等が煩惱の炭が有ればこそ如来の御慈悲が燃つきて、如来の恩寵を現はす器械と為るものとすれば、我等が煩惱とて決して捨つべきものでなく、唯慈悲の光を得て慈光の燃ゆる心念と為さばよいと信じます。

如何にせば慈悲の火が燃えつくぞ

我等が煩惱ぼんのうの炭に慈悲の火が燃つきさへすれば、忽ちに心が一変して、昔に換りて悪にも強きは善にも強きとの諺の如くに、人格は一変するとのことは今は疑はじ。然らばいかにせば我らが煩惱の心

に慈悲の火が燃つくべきぞとの間に對しては、こゝが諸君に御勸め申す肝心な事である。若し火鉢の炭に火を熾んに燃つかせんとする時は、団扇とか火吹筒を以て酸素の風を輪りつける。而すると初めは徴少の火が漸々に燃つきて熾かに為りゆく如くに、念仏とは如来の慈悲の火が我等煩惱の心に燃つくのである。如来の慈光の燃つくのは我等が心である。夫に口に称名を唱ふるのは何の為であるとすれば、恰も火吹筒で煽り立て、酸素の風を輪り込むやうなものである。但し煽り立てるのも炭に火の燃つかせる如くに仏念ひの心を発す為である。

弥陀の慈悲の光が我等の心に燃つく処に念仏の真意が存す。例へば幼稚な子供が、親より命ぜられて汝此火鉢の炭を火吹筒にて吹けよと云ふので、頑固な子供は火を燃えつかせる為とはしらぬ、唯吹けばよいと思ふて、火の消え失てをる炭を吹立てをる如くに、念仏さへ申せばよいと思ふて口に称名を唱へて居ても、心には弥陀の慈悲を離れて居ては無意味である。念仏は仏念ひの心にて常に心仏を念じて離れぬことである。

されば何人も決して救ひを受えられぬ者はない。世に私共の如き煩惱の強き者は念仏しても駄目である救ひを受得られぬと自暴自棄し給ふこと勿れ。真黒な煩惱の炭なればこそ慈悲の火が燃つくので

ある。灰の如きはいかに白く淨いからとて灰には火が燃つかぬ。私共の煩惱の炭は本より弥陀の慈悲の火を燃やす為のものと思へば還つて頼母たも敷しき感ぜらるゝであります。

念の字が二人の心とは炭が独りではなく火と一体と為りてこそ斯は大きな働きを為す。我らが心は一人でなく弥陀の慈悲と一つに為りてこそ非常な力を得、而して勇ましく有難さと歎こびとの燃たつやうな信仰心と為る。日々熾かに燃やす石炭の火力なる念仏にて日々に真善美の浄土に向て進行する。かくの如きの人生の行路は楽しくして且つ前途の光益明かである。

自身は罪惡の凡夫自ら出離の縁なきもの、唯弥陀大悲の懷に抱擁せられて摂化せらるる外なしと、専ら本願の念仏を行ぜられたし。大慈の懷に摂められたる仏の卵はいつか孵化せられて仏子の面目が顯れん。

光明の増上縁

我らが胸中の惡魔は闇き処に伏す。しかし弥陀威神光明の前には妨害ができぬ。闇黒はいかに深重なるも光明には敵することが出来ぬが如くである。光明の生活に入りたいと云ふ欲望が深くして一心に念仏する時は、弥陀の大光明が増上縁と為りて之を妨ぐる所の諸邪業しよじやがうむ繋の闇は必ず消滅す。さうすると光明の人と為るのである。

總ての煩惱惡業の障は弥陀大願力の増上縁に由りて消滅し、又弥陀の強き力に助けられて光明の中に不斷に往進し、念々に仏道を増進し、漸々に完全なる人格に進むことをうるは是れ弥陀増上縁の力である。

世には靈の光に触れてこそ眞の幸福を感じべき事を知らで、唯肉の幸福のみを追ひ求め、人生は形氣の快樂を目的と想ひ、焦つて現在の満足を捉えんとする族が多い。比々皆爾りである。

然るに現世界は決して彼等が希望を思ふまゝに容れて呉れぬ。余りに幸福を希望する結果は、却つて反対に人生に不満を感じるやうになる。若し人は肉我の奥底に潜める靈性が開顯し、靈の暖かなる光の生活に入る時は、求めざるに自ら靈福を感じらる。

如來は大智慧態にて又妙色相好身

我ら信樂して如來の相好光明に摂せらるゝ時は永へに無限の靈光に浴し、また暖められ長養せられ開化せられ靈感不思議なることをえん。

經に如來は是法界身、一切衆生心想の中に入り給ふと。如來は本大心靈態にして、一切の処に実在せざる処なし。ミオヤは常恒に現に此処に在ますことを確信して、活けるミオヤに自己の全幅を献げて祈るべきなり。ミオヤは実に此処に在ませども、自己未だ心靈に活きざる故に意識せざるなり。譬へば赤子が慈母の懷に懷かれながら、母の溫顔を見ることが能はざるが如し。本より法界遍滿の靈体として、現にこゝに在ますけれ共、信仰の心眼開くにあらざれば瞻視おがみし奉ることできぬ。如來は靈体なれば色心不二なり。ミオヤは法界周遍大智慧態にしてまた周遍せる妙色相好身みよしそくごうしんなり。大智慧遍照の故に妙色身も周遍す。

如来の御本体は全宇宙に周遍する処の絶対の大靈体である。是を経に、如来は法界身なりとは是である。大靈態は色心無碍しきしんむがいにして、一方よりは法界周遍する大智慧光明である。一面よりは妙色相好の身と現はる。喻に、宇宙全体が大円鏡智であり、智慧の鏡である。物質の鏡は本明態もとである。其明態の中に、男女の影が映現する故に、鏡は全体明体であつて、而も全体影であるが如く、宇宙全体に遍する明淨なる鏡の如くに、大智慧光明が周遍しており、其れが衆生の信念に応ずるミオヤは大慈悲の妙色相好身と現はる。其が如来「妙色身世間無与等」の妙法身である。されば聖善導は弥陀身心法界に遍し、衆生心想中に映現すとは是の義である。故に宇宙全体即ち如来の法身の大靈態として大智慧光明としての實在なれば、其の智慧周遍と共に、大慈悲も周遍す。大慈悲周遍するが故に、慈悲の現はれるミオヤの慈悲の妙色身も一切の処に周遍せり。只一心に大慈悲のミオヤを信樂愛念しんがくあいねんして止まざれば漸々に自己の心靈發達して、頓とんては大慈の父のミカホを拜見し奉ることを得らる。大慈悲のミオヤ吾目前に在して、我を愛念し給ふことを信じて念々に仏を憶念して止まざれば、大慈悲に薰發せられて、吾らの心もミオヤの慈悲に愛化せられて、ミオヤの如く御慈悲に満されて、日々の精神生活をえらるべし。されば經に斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歆喜踴躍して善心生ずと。

如來の靈體法界に周遍して、我が身心にも満ちたることを眞実に信じて一心に念仏して活けるミオヤと恒に對面し、眞正面にミオヤは在ますことを信じて心に念仏して仏化せられんことを祈り給へ。是れ今日一日の向上を忽緒（きんご）にすべからざる所以なり。

ミオヤの聖意

今我此身は親の賜である。此頭の髮毛より足の爬先（つまき）に至るまで、オヤ譲りならざるはない。胎内十月より、産出されて或時期までは、悉く親の手を離れては活くことは出来ぬ身であつて、此の親の上に又た大きなミオヤが在まして、人なる親に子を預けて、人の身を受けさして、ミオヤの聖意（かみ）に稱はしむる身と成さん為に世に出して戴きたることを思へば、吾らは人生の大ミオヤに負ふ処の恩と義とを感じざるを得ぬ。

興教大師の釈意に曰く、天地万物は法身如來の體、地水火風空識、即ち物と心との二は一體の如來にてましますば、一切衆生の身と心とは同じく如來の一分子なり。

然れば如来は一切万物の大ミオヤにして衆生は即ち其子たり。

天地万物は如来の全能全智によりて活動せり。日月星辰あらゆる天体、地上の万物山川大地草木礦土有情非情一として如来の全能を離れて存在すべきものにあらず。

一切衆生は如来の分子として其自性は清浄なれども、肉我の煩惱に覆はれて染汚罪惡深き生物となれり。故に衆生心は靈と肉との両性を有し、無明の闇に迷て生死にさまよひ六道に流転す。凡夫の心は本性隠れて惡と罪と悩とを具す。無明の為に惑うて罪業を作り、六道生死の中に生れては死し、死してはまた生れ闇より闇に入る。

如来はかゝる迷ひの衆生を憐みて、法身の一大靈力より報身弥陀如来と顯れ、光明名号を以つて衆生を授化^{せつゆ}し給ふ。

阿弥陀とは、衆生を光明の中に授^{さづ}めて、無明の闇を照し、苦を抜き樂を与へ、惡心を化して聖善の心にせんとと思召を以て、アミダ仏とは現はれ給ふ。

衆生一心にミオヤの聖名なる光明の名号を称へて、一心不乱なる時は如来の慈悲と智慧の光明によりて精神中の苦を抜き樂を与へられ光明中の生活となりて如来の聖旨にかなふ。

光明の靈化

万物に光熱を与へざれば一切の星宿世界には生物の生成は出来ぬ生存もできぬ如く、報身の光明遍照の光明を以て、法身より生じたる一切の心靈を開発し靈化して如実の真理を自覺せしめ、円満清淨の徳を成就せしめて、一切を成仏靈化せしむる靈徳を報身と云ふ。

故に報身仏は天の太陽の如く、一切衆生を光明の中に摂取して靈化する処の神尊である。故に天尊と云ふ。宇宙最高至上の天尊である。光明赫々として普ねく十方を照す。此光明に接觸するものは悉く解脱し靈化されざるなし。是十方三世一切諸仏賢聖の共に恭敬尊崇する処、故に最尊第一者とす。いかにとなれば、如来は無量無辺等の光明を以て衆生の惡毒を解脱し靈徳を成じ給ふ。三世一切諸仏は悉く此光明によつて解脱し靈化して成仏し給ふ。故に一切賢聖悉く称譽讚美せざるなし。經に無量寿仏の光明顕赫にして十方を照耀す、諸仏の国土に聞えざることなし。一切諸仏声聞縁覺諸の菩薩衆も悉く共に歎譽し給ふこと亦復是の如しと。

靈性の孵化

宗教の客体として吾人の宗教心に対する大靈力の無くて叶はぬものは三身である。法身は宇宙の全体と能力とにて、此によつて衆生は此本源ありて生産^{うまれ}来て現に活きつゝあり。法身から受けた靈性の卵は報身の光によつて孵化^{ふく}せらる。報身の無量光明が衆生の心靈を摂^とめて孵化し給ふ能力は十方界に遍照するも、若し応身の釈尊が世に出でて懇切に教へ給はねば、衆生は自分の力で其報身の光明を仰ぎて之に靈化せらるゝの真理を知ることとは出来ぬ。故に此三身は一を欠けても吾人の宗教心は成就せぬ。世界の人類は悉く本来斯の如くの仏性具有しながら、応身の教を被らず、報身の光明に摂化せられざるが故に靈に活くことが出来ぬのである。

仏教にても報身の大光明に依りて靈に活べき信念の立ぬ宗教心は円満に完全な活気がない。恩寵の感なく暖温の活気なく、例へば若し天に日光なくば、地上の生物が生存できぬ如く、宗教心に対する

心靈界の太陽なる無量光如來の光明が顕赫にして十方を照曜し、我等は常恒に此の大光明に觸感すること、恰も日光に此形体が照されて生存すると同じ。此肉体に於ても日光の直射を受ける人と受けざる人との健康状態は非常に相違すと云へり。

靈界の太陽の無量光如來の赫々たる光明の直射の下に靈活せる人は、靈に活々充滿し、意氣陽々と一切の生活機能が活躍して、実に常に靈に快然怡樂言ふ可からず。是如來の徳は独り唯理性の寂靜なる光として寒月梅花を照す底の風流のみならんや、春風桜花を催すの感あり。

歸 命

歸命と念仏と云ふことに就て宗教の真理を説き示さん。南無の梵語を歸命きみめいと訳す。歸命の解釋に二義あり。歸本と歸依の中に歸依の義に就て義を明さん。歸依とは、衆生は心が無智無力なれば絶対大なる大威神者大慈愛者に歸依（トツグ）の義である。歸とは世の女子が夫にトツグと云ふ義。詩經に「桃の天々たる此葉秦々此女こゝに歸かへぐ其家宝に宜しく」。一体女子は独り家庭を成し子孫を成すこ

とはできぬ。必ず男子にトツガねばならぬ。夫に婦うづぎて初めて家庭を造り子女を挙げて家室をグワイ能く為すものである。故に男子に嫁することをトツグと云ふ。即ちトツツクと云ふ義である。然して女子が男子に婦うづぐに就ては最良の配偶者を選ばねばならぬ。若しも生涯の運命を一任する夫にして或は放蕩者或は無頼漢の如くならば、又奸邪惡性漢に婦うづぐときは、いかに悲運の酸苦をなめなければならぬ。世には奸邪色魔の毒手にかゝりて惡魔に身を委ゆたね竟には身を醜業婦に酷くられまたは破鏡の悲運を招くに至る如き、概して女子の智慧なく一時の迷の為に竟に生涯を誤るに至るは、即ち婦うづぎ所を誤りたるの致す処である。是は一生六十年の損失なり。まして況や永遠の生命を一任する心靈の婦うづぐべき宗教上の歸命信賴すべき信仰の対象たる本尊（神）を選定するに於ては最も大事なり。

今仏教は一面は一神教、他面は汎神教なれば、一神教の真宗の如きは、弥陀一仏の故に真の本師本仏はなしと云ふ宗風なれば、本尊を選定するの要なし。また汎神教的の禪天台等の如きは自己は仏なれば他仏を本尊とするの要はない。我國の如きは宗教の教不完全なるが故に、迷信多く邪教淫祠甚だ多し。又種々雑多の神を拜し何れの神が最高等なるまた真理なるかを覺せず、実に愚人のあさましき現世祈りの信仰、いかなる淫祠邪教でも選ばざるに至る。それらの邪神魔鬼は衆生の心靈を完全に円満

に成就せしむべきの神にあらず。然るに浅劣なる愚夫野人の信心の帰する処恰も愚なる女が色魔の爲に魅せられて生涯を誤るよりも甚し。是宗教が信仰の対象たる帰すべき本尊を選ばなくてはならぬ所以である。

然るに大乘仏教に教ゆる所の信仰の本尊は最も勝れ最も完全なるもので、宇宙の真理はもと一なれば真理の主なる神格は唯一ならざるべからず。この唯一の本尊を教祖は教へ給へり。仏教に十方三世の無量の諸仏を説き給へども、其中心本尊は無量寿如来なりと。經に「無量寿仏の威神光明最尊第一にして諸仏の光明及ぶこと能はざるところなり」と。而してまた弥陀は諸仏統攝の独尊たるのみにあらず、無量の行願を以て一切衆生の爲に衆生靈性を成就せしむべき誓願あり、聖善導が一々誓願は衆生の爲なりと。故に衆生信仰の帰命信賴すべき尊を求めむと欲せば独り阿弥陀仏に帰せよ。即ち弥陀に帰げよ。弥陀のみ独り無上の愛を以て衆生を摂受して衆生を我有として我（衆生）を成就せしめ給ふ。

例せば女が夫に帰ぎ既に結婚するに及びては、独身の当時とは異れり。また男も然り独身の折には縦令いかなる事を為すも災を妻に及ぼす憂なきも、既に結婚の後若しも我身を過つた事を為さば禍

を妻に迄及ぼすとの懸念あるが如く、すべての事に心の妻にかゝる故に女を称してつまと云ふ。即ち心の妻にかゝりあるの謂なり。妻もまた処女の時代とかはり夫は常に離すことのできぬ心の結べる配者なり。国語に背子せこまた背せと云ふ、常に夫が背にあるの謂なり。彼の衣通姫そとほりめの「我が背子が来べき宵なりさゝかにのくもの振舞こよひしるしも」と。我が夫君を背子と云ふの意にて、結婚して後は心の妻に在り背にある如く、独身の時とは異りて義に於て二人同心の理である。

心靈に於ても亦既に婦命の神格は唯一でなくてはならぬ。之を婦依仏と云。仏に婦きよめぎて爾後は余の外道ぐだうの神に婦きよめせぬなり。是を儀式的に表せば、正しく心靈の婦結、即ち結婚式を婦敬式きやうしきと云ふ。縦令儀式を以て婦敬の意を表せざるも、正しく自己の信仰が唯一の神尊に婦きよめして云何なる事情の下にも婦依信頼の心意が動かざるに至り、また他の宗教の為に婦命の神尊を変更せざるに至れば、正しく婦命の実を成したるなり。然る時は即ち心靈的に結婚したるなり。爾後は心の妻に如来は常に在ますなり。されば從來の独身のそれとは同じからずして、神聖なる如来は心の奥宮に光明赫々と輝けり。大慈悲の弥陀は慈悲の面を注ぎて永へに向ひ給へり。赫々たる威神の前には自から正肅ならざるを得ぬ。愛々たる慈愛の温容を想へば心の悩もまたは怒も和らぎて平和と歓喜とに満されん。

斯く如来が常に心の妻にかゝる時は、自己の精神生活も理想も高尚となり、向上の光明をも得るに至らむ。此れ聖靈なる如来との結婚、是彼が齎らし来る持参財産なり。我れ彼に帰ぐが故に彼は我と離れざるなり。我はあなたの有なり。我は全く全幅を彼に献げて而して彼が我を容るることを悦ぶなり。我全部が彼の所有と為る時は、彼は我有である。然れば、彼は常に心の妻にかゝりて捨てることのできぬ。聖法然が「我はたゞ仏にいつかあふひ草心の妻にかけぬ日ぞなき」と是道詠の意こそ、聖法然が如来の靈と結婚したる上の心理状態なり。

念

念仏の念と云ふ字は、人、二、心、即ち二人相共したる心なり。念は念頭にかゝる。何か自分の外に或物が常にかゝること。例へば金に執心する人には常に念頭に金と云ふものが執して離れぬ。また一人の子に愛執する人の念頭には常に子を念ふてをる。然る時は自分の心の中に子と二人を為してをる。人物若しくは財物とか何物か心に懸る物無き時は念頭になきなり。念頭に阿弥陀仏が在まし

て離れぬ様に爲りしは即ち念仏おもひの心である。従来、明記して忘れざるを念と爲す、と云ふは唯記憶の心理状態の如くにして、感情的執意的になつて居らぬ故に、仏を念ふの心理としては未だ完からず。宗教心は只仏を記憶に存するのみならば未だ活た信仰と云ふに足らず。弥陀の絶対的人格に対して愛慕恋念して、感情的に内心に活躍して、暖温なる活氣に血湧き、有難さに涙こぼれ、すべてに超えて弥陀を愛樂あいせふして止まず。悲嘆に沈む折柄も、弥陀を念ずる時は心の奥底より衝動する有難さに心氣一転、憤怒に耐えざる場合にも、称名によりて思ひ出づる慈悲の面影に接する時は、却て己が到らざるを謝するに至る。念仏とは常に如来を憶念して離れざるの謂いふ、一度絶対の人格者に結びて念ふ心に離たず憶念し愛慕して捨てること能はざるは念仏なり。二人の結びたる心が即ち念である。能念の心に所念の弥陀と一体心に結合したるの心が念なり。

動揺せざる安心

安心とは安置心即ち心の安置をすること。自己の宗教の主とする処の己が帰かへりく所の神尊は唯一無二

独りの神に帰じて二つとならべておかぬこと。例へば貞女両夫に見えずてふ如く、独の神尊の外に併べて帰ぐべき神なきなり。独一の神に心を安置していかなる事情の下にも、其婦命の心を変更せざるなり、命にかけて帰するなり。いかゞなれば、宗教心の帰する処の主尊は宇宙唯一無二の真理の源に在して、いかなるものも変へることの能はざる尊靈に在ます實在者なればなり。

唯一の尊靈なる如来が満腔の慈愛を以て我を愛したまふことを信ずる時は、我も満腔の愛を以て如来を愛念せざるを得ぬ。如来は絶対無限大威靈と大自在と大慈愛とより我らを愛し給ふ慈悲からしていと麗はしき慈悲の面を表はして我を愛し給ふことを示したまふ。其慈悲の表現に対しては実に我等は愛慕恋念せざるを得ぬ。真実に宇宙間唯一無二の靈的人格現に対しては我らは愛念せざるを得ぬ。宇宙全体の大靈より表現したる人格表現なれば其所現の身の大小に拘らず絶対の表現なり。この靈的表現の弥陀より外に自己の絶対的に婦命信愛するものはなし。斯の如来に全身全生命を献げて仕へ奉る。弥陀に帰じて余念なき態が即ち是れ正しく自己の安心決定なり。我全生命を献げて弥陀に帰する所に我は既に是如来の所有となり。我既に如来の所有となる時はまた如来は即ち是我有なり。真実に弥陀を信愛して献げたる我生命なり。弥陀を離れて我生命はなきものなり。故に云何なる事情の下にも

自余の神に信念の念を移転することなきなり。恰も貞婦が夫に対する情操を命にかけて夫に献げたるよりは堅き弥陀に対する信愛の情操なり。

或る光明会員の内に標榜せらるゝ如き善女人あり。年久しく弥陀に帰し念仏をつとむ。予は曾てこの婦人は最も情操の全き信仰家なりと想ひたりき。偶或人の説を聞くに、某善女人は近頃或種の神を尊崇し信仰しをれりと。予は之を聞いて彼の善女人にして斯る迷信に惑はさるゝ如きは有ことなからむと。或日某女人に對問し徐ろに問ふた。「或人の説によれば貴姉は近頃或る某神を信ずると聞けり、実に然るや。予は貴姉の如き堅固なる安心を立て唯一の弥陀を信奉する善女人にして斯くの如きの信仰に入るとは恐らくは然らざらんと。而しながらまた何かの事情の為に止を得ざる故ありて他の神を信ずるに至りしものなるか、願くは実を以て貴姉の信仰の状態を聞かしめ給へよ」と。某女人答へて曰く「妾は弥陀に歸して他の神に仕へずまた他の教会にも出席せしことなかりき」と。更に問ふて曰く「然し貴姉の安心願くは一大事の事なれば、如実に貴姉の安心を告白し給へ。予は実に貴姉に満腔の同情を以て或は万止を得ざる為に他の神を信じたのなれば実の如くに答へ給へよ。正直の頭に神宿る、貴姉の正直なる処に神は感應し給ふべければなり」と問ひしに、女曰く「若し信仰の安心が未だ

曾て決定せざりし時に他の神を信じたりしに、後弥陀に歸し奉ることを得たり。然るに若し旧來の神に對する信仰を廢する時は、其神の怒りに觸れて生命を奪はるゝと云ふ場合は云何に候や、縱令生命を奪はるゝとも其神を信じてはならぬものに候や。生命には替へられぬ故に其神を信じても弥陀はゆるし給ふものにて候や」と。其女の問はれしにより、予は答へて「其は弥陀に一任したる婦命の信仰が貴女に安心決定したる上は、既に弥陀に歸したる身なれば、縱令旧來の信仰を廢したる為に其神の怒に觸れて生命を奪はるゝとも、そは弥陀に任したる上はいかに決心すべきやは、貴女自己の情操に存する處を以て決すべきものにて、他人に問ふて後に決すべきものではない。其安心の決定は貴女の一心の決定である。若し例を以て云はゞ貴女が夫家に歸きたる後自己の運命は已に夫に任せ、而して夫は最も自分の理想の良人、家柄と云ひすべてに渡りて自己の希望を満足せしむるに足る家に嫁したることは実に自己は幸運なりと内心常に悦びたりしに、自己の夫は此良人の外に在る無しと決心したりしに、他にある男子が貴女にせまるに、我妻に為て給へよ、若し我意を容れざりせば我は貴女を殺害せんと脅迫せらるゝ時は貴女其時に當つて云何に答ふるや。縱令生命を害せらるゝとも其仇し男に隨はざるべきやは將た生命に替へられぬ故に其男性にまた一身を歸任すべきに決定すべきや。貴女

は此を自ら決定すること能はざる故に他の同意を得て後何れかに決すべき云何。若し自己の情操に決定すること能はず、他人の同意の下に初めて決定すべき如くならば、斯の如き不貞の婦女、其情操の美として取るべき無きものなり。斯の如き貞操なきものは其に先だちて貴女の夫は貴女に離婚状を与ふならん。肉体の結婚已に然り。況や心靈上の最神聖なる婦命の婚に於てをや。自ら反省したまへ。無智無力罪惡深重の凡夫、墮獄^{だごく}必定^{ひつてい}の身が遇ひ難くして弥陀の本願に値ひ生命を献げて大悲の救済を仰ぐべき身、一度弥陀の容るゝ処と為り身の幸を悦びゐたりしにあらずや。縱令生命を奪はるるとも決して不動の信念を立て全生命を帰献したる上の情操に於て始めて眞実に麗はしき信が加はり、智慧もなく徳もなく何一つ選取すべき無き身が弥陀の容るゝ処と成りしを思へば、生命何の惜きことあらん。貴女が信仰の貞操いかゞ。情操は貴女自身の情操にあらずや。貴女的人格が弥陀に選取せらるゝや、捨てらるゝやは、貴女の弥陀に対する貞操の云何に存すにあらずや。また貴女が信仰の価値の眞と似^にとは貴女の情操の云何によつて決定すべきにあらずや。是弥陀に対する安心してふ心の安置^{あづか}おく処を確乎と決定すべきなり。貴女自から決せよ、是貴女が弥陀に対する貞操なるか不貞腐の安心なるか二つの分るゝ分岐点である。」斯くの如くに一度弥陀に結婚したる爾後の情操と意志決定とはいかな

る事情の下にも動揺せざるが安心決定したる念仏、即ち如来と二人一つになりし心なり。

光明獲得の念佛三昧

起行きぎやうの念仏とは、前の安心を成立せしめんが為に弥陀の恩寵を獲得し眞の信仰生活靈的生活に入らんとし、また靈的生命として活動行爲するの實行方面なり。眞実に弥陀と結合して我は弥陀の子弥陀は全く我父また我夫として、其大なる恩寵にまた光明に依つて自己の靈的生命が成長せらるゝ増上縁となる。光明が即ち弥陀なり。弥陀の恩寵また光明を獲得する方法は即ち念仏なり。

弥陀より衆生の信仰心に与ふる靈妙なる力を光明と云ひ、此光明を仰ぐ心を信念とす。光明とは例へば太陽の光の如し。如来の光明靈力を獲得する人の心を念仏と云ふ。もし光明を獲得して健全なる靈的生命を得むと欲せば先づ念仏三昧をつとむべし。

一心に念仏して心靈の生活に入れば、植物が始め種子より萌發もはつして根基を成し開華けいけ竟に実を結ぶが如く、また人の子が初め胎内に發育せられ分娩出生し漸次に成長する如くに、心靈的生活の生命が向

上し發達す。靈的生活を養成する起行を念仏起行と云ふ。一心念仏して向上する過程は、弥陀の種子を播して、種子に具有する性能が開発して、竟には諸仏と同じく無上正覺の結果を得る。此の種子を成就せしむる増上縁が即ち念仏三昧である。斯の時に種子を播布するは即ち安心である。即ち如来を信樂^{しんがく}して欲生の心を増長せしむるは起行念仏である。

仏を念じて仏の増上縁を被らんに、初めは未だ信仰に如来の實在を確信するの意識もなく、胎内の子が（血）に養はるゝ如く、次に嬰兒の乳汁を吞む如く、また信念の中に靈的法悅等の妙味あるを覺えず、家庭に於て父母に誘はれる朝夕の禮拜式をつとめ、また讃歌を歌ひ、稱名を稱ふ如く、また如来の真理を教典によつて知り得る如く、念仏三昧及び禮拜讃歌等は信仰心を養ふ資糧なり。中に就て念仏三昧を正中正の妙行とす。

若し念仏三昧を以て靈的生命を長養するの妙行なりとするにあらざれば我等が靈性の開發は得て望むべからず。念仏は太陽に向ふ如くに如来てふ心靈の太陽に向ひて向上す。如来は眞、善、美の極にして、この光明に向ひて念ずる時は信念の心も益々向上す。念々弥陀を念ずれば自己の心も漸くに弥陀に同化する。要する處は弥陀は万徳円満にして欠ることなき靈体にして、無量光明の発源体なれば、

念ずる衆生の心の程度に随つて不思議の力を得て信念漸く増進す。始めには信心喚起の増上縁と為て念仏するに随つて心靈喚起する起行と為り、次に念仏三昧の如来の光明は信心開發の増上縁となる。次に念仏三昧は心靈的人格の果を結ぶに如来の光明が増上縁と為る。念仏の起行として信仰の過程三階に渡りて如来の光明は常にその増上縁となる。

三昧に入れ

三昧と云ふは梵語にて等持定と訳す。仏法に無量の三昧あり。念仏三昧法華三昧華嚴三昧等、何れの三昧にても三昧に入るには自己の精神全体を仏の中に没頭して余念なきに至れば、我を忘れて其と己と一体と成つてしまふこと。何事にてもそこに到らざれば妙を得ることは出来ぬ。それには精神が散乱して居つてはゆかぬ。是非統一せねばならぬ。禅宗にて坐禅を修するも先づ初めに精神の統一することを練習する故に、能く禅を修めたる人は何事を為すにも其の方に全心を投じて余念なく事業を為す故に其仕事が完全に出来る。故にこの三昧即ち精神の統一はよく習ふべきことである。

其れには必ず真面目でなくてはならぬ。三昧に入らざれば其のなす事が完全にならぬばかりでなく其業を為すに興味を感じぬ。三昧に入れば自己の精神が其中に没頭して余念なきが故に其れに深く入る時は深く妙趣を感じらる。卑近の例なれども劇を好む人が其の劇場に臨むや其舞台に演じて居る其狂言の中に精神が没頭して我を忘れて居る所に其内心に深く興を感じて居る。其の如くに何事にてもしやうである。

今念仏三昧を修するも、全心全幅を如来の大慈光の中に投じて、心々相續して、一心に念を投じ全く我を投入し、古人の、月や我々や月やと分かぬまで心にすめる秋の夜の月、といふ一心に物の中に我を投げ込んでしまつて、全く無我の状態となりたる所に妙趣を感じらる。念仏三昧のみでなく朝夕の礼拝に如来を讃唱するにも讀の中に我を投じて其に神ミコが入る所に妙趣にいたる。

たとへば如来歎喜の光明に我らが悩みも安らぎて禅悦法喜微妙なる喜樂きはなく感ずなり、と讃唱する時に、唱ふる声に心を誘はれて識らず／＼に其靈境に入ることを得。其靈境に入る時は言ふに言はれぬ妙趣を感じらる。何事にも事を為すには深く興味を感じるに到らざれば、其中に生命を見出すことは出来ぬ。其実境に触れて生命と為らざればまだ三昧と言ふに足らず。

念仏三昧また口称三昧、何れも自己の精神が全く其弥陀の実境に触れざれば活ける念仏にあらず。また一心に讃頌を唱へて、甚深難思の光明を至心不斷に念ずれば、と頌ふ時に我心も此中に没頭して称ふる声に導かれて自然に弥陀の光明中に融け込んでしまふ。こゝに到りて弥陀の靈境の中に眞の我と生れ我弥陀の靈に活くるに到る。こゝに至りて宇宙に周遍する弥陀の大靈と我が心靈との融合する所に我も活き弥陀の実在も此処に顕現す。こゝを三昧の境と名づく。

何人も心靈具有せざる者はない。只至誠深心を以て三昧を修すれば必ず妙処に達すること疑なし。

三昧の練習

すべて何事にても其業を完成し妙所に詣らんと欲せば至誠熱心に精練を要す。いかに立派な天資の良材たりとも之を完全に發揮すべき精練するにあらざれば其資性を完成することは出来ぬ。喩へば鉱物中の最貴重なる金剛石と云へども充分に琢磨するにあらざれば本性の光輝を発することが出来ぬ。人は各自本能に於て弥陀の日光を反映すべき心靈の宝石を具して居る。弥陀の靈光に融合ふてそれが靈

に活き靈の妙味を感じ身は娑婆に在りながら極樂の至美至妙の快樂を感じ得らるゝ性を有つて居る。人々極樂に生れて浄土の快樂無比なるを感じ得らるゝ性を有つて居る。故に極樂に生るゝことが得らるゝならん。然らば必ずしも此身の命終らずとも、心神を弥陀の中に没頭すべき念仏三昧を精修する時は、必ず現身にて弥陀三昧の至美至妙の快樂を感じ得らるゝ何ぞ疑はん。

只須らく要す一心に勇猛精進に練習すべきである。たとへ科学やまた技芸等にても一心に鍛錬して止まざれば、必ず熟達することを得、殊に自己の靈性を發揮して大ミオヤの無上至靈の光明を獲得すべき修行のために何ぞ一心を献げるに惜まんや。此一心の修行に依つて人は從來の非靈なる我より至靈の我に復活す。是人生の一大事である。若し心靈復活して弥陀の光明中に永遠に活きる目的なからば人生何の価値かあらん。我同胞衆に三昧の修行を勧むる所以である。

自己の人格を無視する勿れ

君は今現に人間に生れて居ると云ふことは確かに信じて居るならん。抑人間に身を受けたのが宗教

の必要な所以なので、また宗教に依つて能く練修すれば心靈の光明発得できる可能性を有つて此世に生れたのである。君何故に自己の人格を無視して迎も我々は光明発得できぬと自棄する。若しか是が発得の可能性が具して居らねば人間に生れ来るべき筈はない。君は米を食ふはそれを消化して一分は同化して其血肉と為し、一分は異化して大小便にして排泄して居るではないか。其肉体が其れだけの働きを有つて居る如くに、君が心靈に靈の糧を与へ小児の哺乳して漸々に養育する如くに、靈を養育せよ。必ず君が靈に活きる人となりて人生を真に意義ある価値ある永遠の光明を得たる人と為りて光明の生活に入るべきこと何ぞ疑はん。

君聞き給へ。何人も人と生れたるからは大ミオヤの光明に靈にて活くべき可能性を有する故、一方にはミオヤの實在を信じ、一方には自己の一心の信仰に依つて靈に活きる可能性を有するを信じて、教の如くに一心に念仏三昧を修せば必ず成ずること疑なし。

但し靈の生活に復活せんに三の障害物あり。此が為めに大概は靈に活きるの資格を阻害せらる。其三の障害物は何ぞや。経に憍慢けうまんと弊ひと懈怠たいだとは此法を信得し難しと。此三は何れも靈に活きるの障さわりである。

傲慢なるものは自ら従来の動物生活を以て自ら得々然として、従来の卑賤なる動物我なるを自覺せず。故に自ら謙遜卑下して真に高尚なる靈に活きんとの意志発らず。經に彼らは尊貴自大にして自ら横に道ありと謂うていかんとも降伏し難しといふてある。實に斯の如きの族は已に形は人間たりとも其意志が修羅道に墮していかんとも度し難き徒である。

弊とは六弊とて、すべて心靈の即ち菩薩の麗はしき靈に活きんと欲する高尚なる遠大なる意志の欠けたる人を言ふ。換へて言へば靈的人格要素の資格の欠けたる人、弊とはヤブレたる即ち心の宗教心の器のカタワ者、不具者、心の眼耳無し不具者のことである。世に宗教心の不具物の多いのは、一は是まで宗教が萎れて居たために遺伝素質としても只肉欲の動物的肉欲の方面のみ発達した遺伝にて、靈的方面に乏しかりし為に弊族が多いのとおもふ。實に靈的素質の欠乏せる人間も度し難い。

また三には懈怠である。心靈の精練は金剛石の琢磨である。なま易い事業ではない。従来の肉の我に死して靈に復活するのである。全生命を献げて弥陀に投婦没入して妄想我の皮殻から脱して、ミオヤの子たる靈性がミオヤの慈悲の光明に触れて始めて復活するのである。懈怠の族は靈に活くる資格のない族である。世に懈怠にして靈に活くる事のできぬもの程憫れなものはない。

南無の二義

南無と云ふは、仏教にて自己は罪惡苦惱の凡夫自己の力にては解脱げだつも成仏もできぬ者なれば、之を救済して下さる自己の信ずる神尊に対して我全生命を献げて信賴する至心しきんを表はす言であります。今は我らが一切の神明に超えて最尊たる、大慈悲の父なる阿弥陀尊に対して、己が全生命を献げて救度を請求する至心しきんを表はして南無阿弥陀仏と云ふのである。此には自己の最大の要求ありて、すべてをあなたに投込でしまつて救ひを仰ぐのである。南無とは梵語にて種々の訳があるけれども、今は先づ二義を以て阿弥陀仏に命を歸して信賴する意義を述べんとす。

一、我を救ひ給へ

二、我を度し給へ

この二義である。前のは自分は苦で、空で、無常なる、無我なる生死の苦を生れ乍ら有ておる凡夫にて自分の力では解脱できぬ者なれば、如来の大悲の力を仰いで常住安樂の中に救ひ下されと云ふこ

とにて、後のは、我は罪惡深重にて弱点のみの自己にて、自分の力にては至善圓滿なる仏に成ることのできぬ者なれば、願はくは如来よ、あなたの御力によりて、我をあなたの御子としての靈徳を成就さして下されと云ふ意である。また前のは自己の生命を全く如来の中に投込でしまうて、永遠の生命の光明中に生れ更^からして戴くこと。後のは既に如来の救を被^かむり、心が生れ更りて、光明中の我として光と力を被^かむりて、あなたの聖意をば此身を以て働らきに現はしてゆくことである。即ち人格向上を仰ぐ意義である。

この二者の要求は哲學者のカントが謂ゆる最幸福と最高徳を、要求することである。カントが此世では最幸福と最高徳との両方を完全に備へることはできぬ。最幸福と云へば健康で富豪で名誉ありすべての物質的の満足を得る者を云ふ。此に至つて幸福な人とても必しも人格の圓滿なる道德家と云ふ訳でなく、亦最も人格の高い道德家としても必ず富豪な長寿な幸福な者と云ふ訳にゆかぬ。神の国に於てのみ最幸福と最高徳とが完全に具備することが得らるゝ。神に於てのみ得らるゝと。

南無の二義なる、救我と度我とは此の二者の要求を意味す。救我は此生死の苦に沈むべき不幸な我を救ふて永劫の光明中に最幸福な我にして戴きたいと云こと。度我とは此弱点の甚しい罪惡の我をあ

なたの御力にて聖意にかなう人格に御育てを仰ぎますと云ふ意味である。

ミオヤなる如来の、衆生（子）に対する思召は、最幸福にして而して最も高德な、福德円満な身にしてやり度と云ふ処にある。そこで南無と云ふ子の方より我を生死の苦を離れて最も幸福なる極楽の人として戴きたいと、また最高徳なる仏に成り度いからあなたの光明を以て無限に向上させて戴きたいと云ふ義である。而して今如来の中に心の生れ更りたる時は必しも命終をまたずとも、精神的に其分に応じて此二者の要求を満足して下さるのが如来が私共の信仰に報ひ下さることである。其意味を是から説明します。

我を救ひ給へ（我に最幸福を与へ給へ）

我を救ひ給へとは大悲の父よ、私は今罪惡深重なる者にて現在にも未来にも、身心共に苦しみ悩み種々の憂愁恐怖煩悶のつひに止むことなきものであります。未来も地獄の炎に焼るゝ外なきものなれば、絶対大たるあなたの御力によりて、あなたの大慈光明中に救ふて戴き、永遠の生命として活かし下され。私は全生命をあなたに献げて投込でしまひます故にあなたは我をあなたの所有として助け下され此罪と悩とにて永劫浮ぶ瀬なき我をあなたの聖意に投歸してしまふてからは、今迄の自分と云も

のは認めませぬ。此に於て有ゆる罪も業も悉く大悲の光の中に融込でしまうて、全く救はれた身となる。

我に未だ救はれざる我と救はれた上の我とは天地雲泥の差がある。生れたまゝの我は肉の我動物的の我にて、人間てふ狡猾な罪を造る我、神心たましひを煩悶ともだしし悩乱する我である、有ゆる動物中に最も精神の煩悶や苦悩の多いものである。而して世の文明に進めば進む程心の煩ひが重なるのである。世の凡愚の人は唯物物質欲の満足を得れば幸福は其中に在るものと思ふてをる。人生自覺のなき者の物質の満足は還て己を苦しめる本であることを知らずしてをる。金銀財宝必ずしも人生を幸福にするものではない凡愚物質欲に満足を得て之を以て至つて幸福と自からきめてをる。動物性に甘んじてをる族の如きは人生の意義を語るべきものでない。苟しくも人生の意義に対して心意を注ぐに到らば、必ず人生を精神的に価値を発見せんとすべきである。

我教祖釈尊が若くして王宮に在りし時、人生問題に痛く煩悶したまひ、縱令王位を履ふむとも老病死は免るゝこと能はず、いかに富四海を保つとも、無常と苦空とを遁るに由なし。人生の苦、生死の悩はいかにして之を解脱すべきものぞと。此が皇太子をして尊き王位を破やぶ砕くだの如くに捨て、上無き栄花

を価値なきものとして入山学道してつひに臘月八日の曉に、人生生死の重荷を捨て常樂永恒の光明界に入りなされた動機であつた。釈尊が人生の重き苦悶を解脱して、弥陀常樂の光明中に神を安住するに到りしは、これ宗教的に云はば、弥陀の光明に救はれたる状態である。

何人も未だ救済の実を得ざる間は、よしや物質に満足を得やうとも精神には眞の満足と眞の幸福を感ずることはできぬ。

先日或求道者に問ふた、あなたは自己精神中に総てのことを暫らく放棄してしまつて全く赤裸々の我に為て見た時に何の感じがしますと。其人の曰く、そう云ふ時に何となく只不満と不安とが感じられますと。どなたでも正直に告白したならば、これに歸するものであると思ふ。赤裸々の我に不満と不安との感じのないと云ふは外部のことに紛れてをるからで、自から知らずしてをるのである。

赤裸々の我に不満と不安の感じあるはこれ何人も宗教を要求する性能が具はつてをるからである。人間の思想や感情と云ふものは世の外界の事に紛れ易いものである故に、是非宗教を求めて、ミオヤの救を受けて始めて眞の赤裸の我に満足と安心とが得らるゝのである。先年ある村の村長に対して宗教を求め給へと勧告したけれども、村長氏は自分はどう考へても宗教の必要を感じることが出来ないとい

答へた。漸く一年経た翌年再び会ふた時は、前とは全然替つて自分の方から切りに道を求むる心が熾に起てきた。それは最愛の女に先だたれた為であつた。若し全く人の性情に欠処なくば最愛の乙女が死なうとも自己が死の宣告を受けようとも或は驚怖、或は悲傷する筈は無からん。然るにかかる場合に臨む時は何人も忽ちに感情に欠陥の現はれ来り、或は驚怖し或は哀悼に耐へぬ感が起り来るに相違ない。これ何人もミオヤの救ひを求むべき性情を具有する兆候である。未だ救はれぬ我には、外界の眼前に自分を眩惑するところの眼や耳また口腹の快楽などをさけて赤裸の我と為た時は、何も我に慰安するものもなく内容を豊富に楽しましむるものもなく、只不安や寂寞の感のみであらう。而して過去を顧み将来を慮り、取越苦労や種々の憂愁や、恐怖は常に襲ひ来りて我を悩ますであらう。かかる時には天にも地にも彼が心に入り来りて彼がすべての悶や悩を取り去りて、えも云はれぬ天上界の歓喜と妙樂とを齎し来りて慰むるものはない。故に未だ救はれざる我は実に不幸なもののである。

救はれた上の我。先の我は人間の子としての我、煩悶や苦悩を集めて我としてをつた故に、外界の僅の刺激にも直に破裂して、自ら苦しみ悩む性質を以て充滿してをつた。今度は従来を生れたまゝの

我は実にあてにならぬもの、又苦しい我なるを自覺して始めて大悲のミオヤに歸命して永遠の救ひを求めた訳である。いと狭い悩の我を絶対無限の大悲の光明中に投込で、その光に融合うて全く救はれた身となる時は、今迄の罪と悩の我でなくて、尽十方無碍の光明中に天地広く日月永く常樂我淨の園には真善微妙の花匂ひ、法悦の楽しみは是れ如来他受用の妙用にて禅悦の歆びは是ミオヤと共に受けるミ子の情となり、永遠の生命と常住の平和はミオヤの中に一切の子等と共に享受する眞の靈福と感じらるゝ。

已に救はれてからは身はまだ娑婆に在るも神は淨土に逍あそぶ。肉眼では昨日に替らぬ憂き世の中も、心眼を以て見る時はこゝも即安樂の都蓮華藏の世界。されども我等は生々の習慣世々の余習、氣に食はざれば怒も発せざるを得ぬ。然しいかに怒の炎の中にも心の前に大悲の面影笑を含みて在ますと想ふ時は、怒の炎も自づと消ゆる。或は悲哀に襲るゝ時も、口に我を救ひ給への南無の前には阿弥陀大悲の親様が無限の慈悲を以て慰安て下されば、有難さに充されて悲しみも転じて菩提の縁となる。すべて何なる苦しみも悩みも如来の慈悲の中に融合ふからは永生の樂と化す。已に救はれし上は無限の光明中に無上幸福を感じらるゝ。されば形は娑婆に在り乍ら、神は常樂の光明中に安住す。其

光明に只自己一人のみではなく、大ミオヤの中に世の総ての同胞と幸福を共にするのである。

何にせば救はるゝか。

諸君は上の如くに、已に救はれた上には、身は此土にあり乍ら心は常楽の光明中に真の幸福の日暮しが出来うると聞く時は、どなたもその希望が発るであらう。然らば如何にせば救はれることが得られようと、問ひなさるでせう。此救を得る道に二通りあります。

一、聞信

二、修信

聞信と云ふことは、実には健全なる信仰の道ではないが、真宗杯には連りに唱へてをる故に暫く之を許して信を得るの一端とす。聞信とは即ち知識の教を聞て能く其安心の趣旨を徹底して全く光明を獲得すること。二に修信とは一心に念仏して直に弥陀の光明に触れて慈悲の中に融込で光明中に安住すること。初めの聞信は真宗にては能く弥陀の慈悲を聞て、信心の真を得る時は歓喜の一念に無為金剛の信を得ると云ふ。また信心は凡夫の心に非ず、仏心である。其仏心が凡夫に授けられ給ふ時に、信心獲得したるものである。また信心とは第十八願を心得ること、即ち南無阿弥陀仏を心得るのである。南無と帰命する一念に発願回向の心、如来より凡夫に回向し給ふのである。此時凡夫無始の悪業

悉く消滅し正定聚に住し煩惱を断ぜずして分に涅槃を得ると。若し此に到れば既に救はれたる相とす。救我の方面にのみ勉むるのは真宗の伝道である。如何に口に称名すとも全く自己を獻げて如来の真を得ざれば無効に帰すと。已に信心獲得してよりは只報恩のために称名すべしと。救我の方に就ては浄土宗の主張よりは真宗の方が勝れたるやに思はるゝ。

浄土家の勉むる処に依れば、若し之を剣道を学ぶに例へば、平常の念仏は剣道の稽古やまた試合にして、臨終の念仏のみ真剣である。たとひ平生いかに習練を積むとも若し臨終の真剣にして敗を取る時は平生数十年の念仏も悉く水泡に帰す。真実の救を得るの事実は正に臨終の一刹那に在りと、是れ浄土家の安心であると。恚りければ今現に浄土家の伝道家と雖も、自分は平常念仏するものゝ、往生を得るや否は臨終の後でなくては未決定である。臨終の往生が即ち救済の実であると。故に浄家の伝道家謂らく、平常はいかに念仏するも救はるゝや否やは未決定であり、夫が信心歓喜とか、また感謝念仏と云ふことは謂れなきことである。故にもし偶々念仏者にして歓喜とか感謝と云ふ語を聞く時は彼等は之を違安心として排斥する。亦甚しきは念仏は唯死後の為にのみ唱ふべし、現に如来在ますと直接帰命の想を以て念仏する如きは宗の本意に非ずと。斯る訳なればある浄家の勸方にては我を救

ひ給へと云ふ念仏にて救を得るは臨終に拘はるものとす。

教祖釈尊聖法然の精髓を仰ぐ吾人は、我を救ひ給へと念仏は其趣を異にす。我等は必ずしも、臨終を待たずとも今日より疾く救はれて光明中の人となるべきことを勉むるものである。

我を救ひ給へと要求はかやうである。我等は本如来より受けたる仏性を具へてをると共に衆生の煩惱の皮殻を被むつて居る。仏性は鶏の卵のやうなものにて自づと独りで孵化するものではない。生れたまゝの我は煩惱の張本にて罪惡の源にて諸の苦惱の我である。煩惱の我のみ勢力を持て居る故に常に罪を造り苦を感じて生々世々永劫に安き事は出来ぬ。そこで今は從來の我を弥陀のミオヤの慈悲の中に投込で攝取の光明に同化せられんが為に南無阿弥陀仏と言の如くに心をミオヤに歸し奉りて、念々相續して至心不斷なる時は、喩ば鶏卵の孵化して皮殻を開き裂て雛子と為る如くに仏の子と生れ更る。これが救はれた我である。

救ひを得るとは信心獲得と同じ心である。弥陀の慈光に融合て卵子が皮殻より出で、雛と為る時は広き天地の空気を吸ひ明き光の中に出たる如く、已に信心開く時は得も云はれぬ靈感や有難さを感じらるゝ。釈尊が六根常に清らかに光顔永しへに麗はしく在せしは、弥陀の光明中に心の生活をなされ

給ふことの現はれなので、聖法然の如き、其他の弥陀の光明に觸れて靈に生ける人は、本の生れたまゝの我でなく弥陀の靈光に復活した我である。是を救はれた我と言ふ。かやうに本の動物の我を獻げて御子の靈徳の我とならんが爲めに我を救ひ給へと阿弥陀尊に要求するを救我と云ふ。

真宗の信者が已に信心得たる上は夜を昼に紹^つぎて幾度となく我の救はれたるを喜びて、之を思ひ出しては有難うございますナムアミダ仏と感謝しても尽くる事なき有難さである。已に救はれた上は、三惡道に落つるにきまつて居つたものが慈光の中に救はれたのであるから実に之を思ひ出ては感謝の称名を禁ずることが出来ぬ。此段になると従来の浄土家の信者が現在では救はれる事は不可能である。全く死後ならでは救はれぬと言ふ流儀は、真宗の現在より救済を蒙りて光明中にいと幸福な感じの中に報恩の称名唱ふる信者の方が幸福と云はざることを得ぬ。されば彼の門徒はアア幸福ものと自ら感じて報恩の称名を洩^もしてをる。

真宗の念仏は救はれた上の仕合せを感じて称名する身となりしは実に幸福である。然れども唯念仏を救我の方のみに偏して更に進んで信後に我を度し給へとの上の大菩提心の信仰なきは大なる欠点である。信仰に依て真の幸福を得るは可なり。然れども積極的の宗教生活として人格の向上を求むる

は信仰の眞価値なるものである。人生の眞意義は人生は最終至善の極所に向つて其光明中の向上の一
路として意義あり、また価値あるのである。若し宗教を唯生の苦死の怖を離れて永恒の常樂即ち幸福
を求むるのみならば、いかに信仰を得て精神的に幸福を得たからとて、身体生活の苦は免がれぬ寧ろ
疾く死して浄土に生れんには如かじ。さはなくして人生には積極的の意義あることは救度なる人生向
上の大道に於て信知せらる。大乘仏教の眞意を得ざる或念仏者の現在に於ては救はるゝ事不可能であ
ると偏する信者や、又眞宗の如き弥陀の光明に人生向上の無上の力あることを解せざる欠点ある教よ
り、進んで吾人はミオヤの眞意を信じて如来を念ずるものである。

我を度したまへ（我を仏の子として円満な人即ち仏として下され）

既に救れた我は心靈が生れ更つた精神生命となる。然る後は我を度し給へとの大菩提心を發せる仏
子である。仏子は上はミオヤの円満なるを理想として向上を旨とすべき意志がなくてはならぬ。度と
は梵語の波羅密はらみつの事にて、到彼岸とて現在此岸の我より人格が向上して最上至善の円満なる道德の究
竟せる仏の位なる彼岸に進んで行くことである。度我の念仏は如来よあなたの聖意を被むりて恩寵の
光に依りて私の道德心を育てゝ円満なる人格即ち仏にして戴き度いと希求を南無阿弥陀仏とす。真

宗では救はるゝ目的は只仏の中に無上の幸福を享受することである。それを得れば只感謝する外はない。此外に如来に対してもう要求する所はないときめ込んでゐる。如来を唯慈悲の深重な母親とのみ信じてゐる。尙進んで如来は神聖と正義とを有してゐる大慈の父である。母として子に対する願望は我子はすべての苦悩を脱して永遠の生命常樂の幸福を得させたいと言ふ所にある。父としての弥陀は我らすべての子に対して望む処唯夫のみでは満足できぬ。父なる如来は我等を人格向上させて仏子の働き世嗣の天職（菩薩）を志し、無上の願行を成就させて円満なる人格、善き人となしたいと言ふ望を以て子を育み給ふ。但し世の親とても、我子に幸福な身安心のできる身にしてやりたいと言ふ望は勿論なれども、更に進んで人格を高等にしてすべての人に愛敬せらるゝやうに尊き人格にいたしたいといふ望を持つてゐる。

されば往生論註に曰く、若人但極樂の受樂無間なるを聞て樂を貪るが爲に往生を願ふは不可である。抑々往生を願はんものは願くは仏に成りたいとの心を発すべきである。其の仏になりたいと言ふは仏に成らねば一切衆生を度す事ができぬ。衆生を度したき故に我仏に成りたい。而して一切衆生と共に普遍的に安樂を得たい。即ち一切と共に永恒の安寧を得たい。之が願往生の菩提心である。之が

如来の聖意に合ふ志であると聖曇鸞が釈し給ふてをる。我を渡し給へと私を向上させて戴き度いとの望は全く慈父の聖旨に対する子等の志願である。諸の菩薩は波羅密万行を以て益々向上して一切の善を修して無上の仏果を期す。

願はくば我如来の御子として、諸仏の如くに円満なる人格、仏になりたい、との最上高尚なる最上遠大なる希望は、阿弥陀仏と言ふ最上極致の至善の都に在ますミオヤの御許に到達すべき心意である。然るに聖道家の菩薩六度万行はミオヤを離れ自ら之を遂行せんと欲するが故に甚だ至難な事である。今念仏の度我の波羅密は大慈悲の恩寵の光を被りて向上するが故に至易である。

私共はミオヤの光明の道德的靈化の御育を被むる次第は例を以て言はゞ天の月と日との関係の如くである。月自身には元光なき物である。日光の反映即ち牙かに照る月光と為つてをる。月が初め二三日の新月より十四日に至る迄漸次に月の光に盈てゆく。我を渡し給へとの念仏は私共の菩提心の月が弥陀の日光加はる毎に一夜々々に光を増すべく道德の向上を期することである。次第に光が加はりて十四日夜に至ることを菩薩の満位とし、既に十五の満月と為りしは之を菩薩の地を超て仏位に到つたのである。

人生の最終希望

人生最終の希望は我を度し給へと言ふ念仏に依て満足することを得。念仏は人生の生命である。無量寿と為るはミオヤの賜である。また念仏は人生向上の大光明である。靈の生命の源泉である。若し弥陀の光明に指導され靈化される人は必ず無上仏位に到ること必せり。人生の最終目的は那邊に在るぞとなれば。二方面より人生の帰趣する真理を信知することを得。一方は宇宙の大法に随順して最終至善の極に到達す。一面は自己の心の奥底に潜伏せる靈性を開發して円満なる人格を完成す。人は宇宙の大法を離れて活きることは出来ぬ。また宇宙の根元に還ることもできぬ故に宇宙の大法に則^{つと}なくては至善の極に到ることできぬ。また一方の自己の奥底に伏在せる本能性に具有せるものを發揮することは不可能である。宝石の資材でなきものをいかに琢磨すとも光輝を発するものでない。

阿弥陀仏は宇宙の大法より一切衆生を最終の至善なる無上仏地に攝取して円満なる仏と為さしめん為の大光明者である。若し弥陀の光明を離れて一切衆生の成仏すると言ふ理あるべからず。太陽の光を離れて此肉体の生活し能はざると同じことである。されば過去の一切諸仏もまた現在の善逝^{はんにび}も悉く念弥陀三昧に依て正覺^{しょうかく}を成ぜりと經に示されてをる。

弥陀の無量無辺の光明また清淨歎喜智慧不断等の光明は遍ねく法界を徧照して在ますは一切衆生の心靈を開発して円満なる人格即ち成仏させんが為の大光明である。また一面吾人一切衆生には元より法身仏より受ける仏性を具有す。之を靈性とも言ふ。此仏性が即ち吾人の仏となり得らるゝ性能である。法身より受けたる吾人の仏性は必ず報身の光明に摂取せらるゝにあらざれば靈化して仏となる事が出来ぬ。吾人が人生の最終目的はミオヤより賦与せられたる靈性を發揮して円満なる靈格即ち仏となつて始めて完成したのである。

此目的を達せんには宇宙の大法なる一切衆生の心靈を摂取し靈化し給ふ弥陀の光明を仰がざるべからず。弥陀の光明には一切衆生的心靈を靈化し給ふ不可思議の靈徳を具備し給ふ。

其の如來の神聖と正義と恩寵との光明を以て我ら子等の心を道徳的に向上さして下さる。

我等が御育を被むる万徳の中に於て三四の徳目を挙げて述るならば、一心に念仏して弥陀の慈悲心に同化する時は他人に対して親切の心と為り、悲しみ悩める人には同情心に富みて他人の苦みが我が苦の如くに感ぜられ、之を安からしむるやうにする。他人の喜びをば我が喜と感じらるゝは之を布施波羅密はらみつと言ふ。初めには人間の心ばかりが働らきて仏子の心は現れて来ぬけれども、此処が我を度し

給への念仏なりと思ふて如来の加被を仰ぐ時は道德心が力を増すやうになる。すべてに渡つて波羅密とは向上進歩することである。

正義波羅密は戒度とも言ふ。如来神聖の光明に照らされて自己を反省する時は自らの邪や悪きことは全く聖旨に契はざるが故に矯正して正直な善き心に成りたいとの向上心が増進するやうになる。

人生は全く円満なる人格に向上すべき修行の道場と信ずる時は縦令他人より罵詈謗せらるゝとも是ミオヤより我が鉋鉄を鍛鍊して菩薩の名刀と為さんがための御方便と思へば如何なることも安忍せらる。経に菩薩に常の師はない。若し己が欠点を指摘し非難を加へ己が短所を能く見出して謗る人こそは、我を矯正し給ふ恩師とせよとの御聖訓辱けなく感じらる。また経に縦令悪人の為はねはねあひくじに骨々ほねほね相挫あひくじかれ節々むかしちりちり支解しえされても甘露を飲む如くに忍べよと教へ給ふ。初めにはなか／＼に忍び難き事をも歩々に進むべく御育を被むる。のちには安じて忍ばるゝやうになる。

人生はミオヤより受けたる鉋鉄の心性を報身の光明を被むりて鍛鍊すべき修行の為に遣はされしものと想へば、益々勇猛に進みて、何なる難事にも勇氣を鼓舞して当ることを得るのである。また各自の職業はミオヤよりの使命なりと信じて業の貴賤に拘はらず念仏の光明中に勤勉努力する時はいかな

る業務も波羅密なりと自覺せらるゝ。

一心不乱に念仏し如来神聖の光明に琢磨せらるゝ時は金剛石の如き玲瓏たる人格の光彩を放射するに至らん。

また一心に念仏して一心の明鏡研磨する時は如来神聖正義の光が自己の意志に反映して尊とき人格の光を放たん。

若し念仏は只救我の一面にして真の幸福を得るのみを以て目的とする時は此の娑婆即ち忍土に処して空しく生活の苦を受くるよりは疾く浄土に往きて法性の常樂を受くるに如かじ。其反面なる度我の念仏即ち人生を光明中に向上の行路として始めて此忍土の精神生活の真意発見することを得。衆生が向上して成仏を期せんに此世界には寒熱の氣候水火風雨等の災禍あり。また人爲的にも悪人の爲めに逼惱せらるゝの難あり。かゝる処に於て修行せば吾人無始以来鏽つきたる仏性の名刀を磨くに荒砥を以て荒鏽を去ること還て疾き如くである。されば經に此土の一日一夜の精練修行は彼の浄土に於て百歳するよりは勝れたりと。若し此土は吾人が仏性を鍛鍊すべき修行の道場なりと信ずる時は吾人の心靈を琢磨し鍛鍊するの道具能く備はれり。

度我の念仏。

我を今の不完全より完全に趣かしめ給へ。

現在の未成品より仏子の品性を成就せしめ給へ。

我が此土に遣はされし使命を果さしめ給へと。

この度我の志願を成就せんには寧ろ此忍土生活の価値あるを覺らるゝのである。

神聖（如来が衆生の道徳行為を照見の智慧）

神聖は誠の道の光にて人の知見を照すとぞしれ

明けき聖旨^{みむね}の照すみかゞみに日に幾度かうつしてぞみん